

## 室町幕府と「武家伝奏」・禁裏小番

家 永 遵 嗣

### 【はじめに】

中世国家と近世国家は領有秩序を大きく異にするけれど、朝廷と幕府との関係には制度的に継承された部分がある。「武家伝奏」と禁裏小番はその代表的なものである。本稿では、足利義満・義持・義教期における「武家伝奏」と禁裏小番の形成事情を論じる。

田中曉龍氏は、<sup>(1)</sup> 霊元天皇が小番衆を側近形成の場として活用し、近臣の「超越」を多発させて、労功と先途によって構成されてきた従前の公家社会の官位制的な秩序との間に矛盾を引き起こしたことを指摘されている。本稿が近世史研究から学んだ点である。

第一章では、永徳三（一三八三）年に足利義満の発意で「内裏小番」が創設された事情を検討する。その背景には観応の擾乱を契機として始まった持明院統の内部分裂が潜んでいた。当時、兄である崇光の血筋と弟である後光厳の血筋とが、皇位と家産（長

講堂領など）を巡り争っていた。義満は閥閥関係から後光厳流と親しい。小番衆制定の狙いは、廷臣たちを崇光流から切り離し後小松天皇に結びつける点にあったとみられることを述べる。

第二章では、「足利義満の仰せを奉じる伝奏奉書」が出現する事情を検討する。出現の契機は義満の従弟にあたる後円融上皇の死没と判断される。後円融の子である若い後小松天皇に対して、崇光上皇が院政をしく可能性があり、義満は伝奏を掌握することで崇光上皇の院政を阻止したと解される。これは、応永五（一三九八）年に崇光上皇が没したあと、崇光の皇子栄仁から長講堂領を奪い、無力化する動きに繋がる事実とみられることを述べる。

第三章では、いわゆる「武家伝奏」の出現事情を検討する。後光厳流が崇光流を制したのち、後小松上皇と足利義持との交渉を媒介したのが伝奏であった。この業務を引き継いで、足利義教の

嗣立期に、「公武間申次」すなわち朝幕交渉の媒介業務、が特定の伝奏に割り当てられる慣行が定着した。「武家伝奏」「公武伝奏」「惣伝奏」の通称が生じる淵源とみられる。また併せて、称光天皇に皇子がなく後光厳流が断絶したのち、後小松上皇の遺詔で崇光流の伏見宮貞成親王（後花園天皇実父）を「治天の君」とすることが禁止され、足利義教が「治天の君」の業務を代行する形になったことを述べる。

## 第一章 足利義満と「内裏小番」

### 【後光厳流皇統と崇光流皇統との対立】

一四世紀後半の持明院統は二つの皇統に引き裂かれていた。原因は、光厳上皇が花園上皇の妃宣光門院（三条実子）に通じて産ませた直仁親王を正嫡とし、自らの妃陽祿門院（三条秀子）が産んだ崇光天皇の子孫を皇位継承から排除したことにある。

史料①「熊谷直之氏所蔵文書」康永二（一二三四）年四月一三日

光厳上皇置文<sup>(2)</sup>

### 定置 継体事

① 興仁親王（崇光天皇）備儲武之位先畢、必可受次第踐祚之運、但不可有継嗣之儀（若生男子者、須必入釈家、善学修仏教、護持王法、以之謝朕之遺恩矣）、以直仁親王所備将来継体也、

子々孫々稟承、敢不可違失、② 件親王人皆謂為法皇（花園上皇）々子、不然、元是朕之胤子矣、去建武二年五月未決胎内「宣光門院」之時、有春日大明神之告已降、偏依彼盡倦所出生也、子細朕并母儀女院之外、他人所不識矣（中略）、③ 興仁親王登極之日、須必相統備小陽之任也、遂昇大統之位矣（中略）、天下政務并長講堂管領以下事、次第稟承、從今上迄于直仁親王、将来之相統、一如朕之遺訓矣、興仁親王一瞬之際計略、別所定置如左

□（一）因幡国

一 法金剛院領（加熱田社領）

④ 件国衙及院領等、一瞬之後、必可返與直仁親王、其間用意重載別帑賜之（中略）今所定會非好惡非私曲、以有所觀、遠胎斯言、後生必如金重、如石堅、而輕莫共（ママ失）朕意耳  
〈詣長講堂、本願皇帝真影之宝前、熟有起請之旨、即時染筆記之〉

康永二年四月十三日 太上天皇量仁（光厳上皇花押）

（〈〉は史料中の小文字表記、（ ）は引用者注）

光厳上皇は康永二年四月一三日、長講堂において後白河上皇の月忌供養を行った際に、史料①の置文（起請）を定めた。呪詛の対象となつて行動を規制された者は、光厳の第一皇子である光明天皇の皇太子興仁親王（初め益仁・のち崇光天皇）である。

傍線部①では、興仁が子孫に皇位を伝えることを禁じ、皇子誕生の場合には仏門に入れるように定めている。故に、興仁（崇光）の皇子榮仁王には皇位継承権がなかったことが分かる。傍線部②では、直仁が世上に言う花園法皇の子ではなく、自らが花園の妃宣光門院に産ませた子であると断言している。また、建武二年五月、光嚴が西園寺公宗らとともに建武政權打倒の策動に着手する時期に、春日神の託宣で皇子直仁の受胎を告げられたとし、直仁を重視する所以を述べる。傍線部③では、「天下政務并長講堂管領以下」は直仁に帰すとし、傍線部④で興仁の一期分は直仁に返還すべしと定めている。周知の通り、崇光の同母弟弥仁王（後光嚴天皇）も妙法院に入れられ、皇位継承から排除された。

ところが、観応の擾乱（正平一統）に際して、光嚴・光明・崇光三上皇と直仁廃太子が南朝によって連行され、皇位継承候補として想定されていなかった弥仁王（後光嚴）が登極するという異変が起きた。その後、直仁は入道し、延文二（一三五七）年に帰京した崇光上皇は皇子榮仁親王の登極を希望した。ここに二つの皇統の対立が始まる。

後光嚴天皇の登極に大きな役割を果たしたのは祖母にあたる広義門院西園寺寧子だが、広義門院は後光嚴天皇に持明院統の家産である長講堂領等の支配権を与えなかった。踐祚直後の『園太暦』観応三（一三五二）年九月八日条に「長講堂領事者、女院御沙汰也」・「諸国事、禁裏御世務之由也」とある。長講堂は持明院統の

祖先祭祀の場であり、長講堂領はその財源である。後光嚴天皇が長講堂領に関与できず、女院自身は持明院統の祖先祭祀を執行できないため、持明院統の祖先祭祀は停止状態となった。『園太暦』延文二（一三五五）年三月一三日条に、「今日後白河院聖忌、御八講無沙汰勿論也、其外無御追善事歟、近來宗廟社稷之神事、皇祖皇親之法事、大略停廢」とある。

かかる犠牲をあえて払った理由は、持明院統の家長であった光嚴上皇（寧子所生）が弥仁王（後光嚴）の登極に反対であること、広義門院が認識していたためらしい。広義門院は後光嚴を中継ぎの地位にとどめるために家産の支配権を分離したのだろう。

史料②『園太暦』観応三（一三五二）年八月一七日条

今度事、兼日被経沙汰、逐本朝繼体天皇之往躅、温西漢孝文皇帝古事、所被行也、是群臣義立也、兼日沙汰之次第、見此間連々記、旧主（崇光天皇）不坐、不被行節会、神璽・鏡・劍不被渡、寿永以後例、太上天皇詔命、又不被下、仍太上天皇（光嚴上皇）雖御南山、猶以為如在儀、可被作彼宣命之由、雖為問題之端、今度事、彼叡慮不和之由、有風聞、就其、祖父（ママ祖母）女院（広義門院）度々御難渋、而依武命之嚴密、女院御許容云々、然者争可有如在礼哉之旨、予殊申入了、寛和花山院御出家、翌日以如在礼被下詔命之由、雖有所見、今度儀曾不相似歟

洞院公賢が後光厳踐祚の日の日録に記した記事である。「旧主」崇光天皇の不在、神器の不在、治天の君光厳上皇の不在、という異常事態に直面して、廷臣らが苦慮したことを述べる。神器を伝達できない場合、後鳥羽天皇の踐祚以降、「太上天皇詔命」によって正統化してきた。後光厳の踐祚についても、光厳上皇があたかも京都にいて自ら詔命を発したかのように装って伝国院宣を作る、「如在儀」とすることが検討された。

しかしながら、広義門院が「彼叡慮不和」、つまり、光厳が後光厳の登極に反対だという風聞があると主張して後光厳の登極に反対した、とある。既述の史料①康永二年光厳上皇置文には、崇光（興仁）流を斥けて直仁を正統とする光厳上皇の考えが明らかである。弥仁王（後光厳天皇）は皇位継承のうえでは問題外の人であった。光厳の生母である広義門院がこれを知っていたということは、如何にもありそうなことである。

記主の公賢は「如在儀」に反対した。彼は光厳の真意を明確に知っていたのである。公賢は宣光門院三条実子の従兄弟であり、息の実夏は直仁の東宮大夫である。<sup>⑤</sup>光厳の特別な信任を受けて、正平一統期にも直仁の登極のために心を砕いていたのである。<sup>⑥</sup>

幕府は誰でも良いから即位して欲しいという態度であった。在京していた持明院統の在俗の男子皇族は、崇光の皇子で当時二歳の栄仁王、<sup>⑦</sup>崇光の同母弟で当時一五歳の弥仁王であった。一条経通は「群臣義立」により摂政が新主を踐祚させる案を示した。<sup>⑧</sup>こ

の案では栄仁・弥仁いずれも候補たり得る。二条良基は新主を元服させて自立踐祚させ、関白補任の口勅を発する案を示した。良基の案は弥仁の踐祚を前提としている。実際には後者が行われ、良基が関白となる。<sup>⑨</sup>臣下（摂政）が光厳の意思に反して踐祚を主導すれば反逆となり、同時に光厳が臣下に背かれる姿になる、と懸念されたのではあるまいか。結果として、光厳の逆鱗に触れるのは弥仁王（後光厳天皇）となったのである。

他に打開の手段のない状況であったが、弥仁王の登極には正統性がなかった。二条良基、また、頭弁として弥仁王の登極儀礼を取り仕切った万里小路仲房、登極後に頭弁として後光厳を支えた勘解由小路兼綱らは、以後、後光厳流の与党として皇位継承問題に関わる。彼らは同時に、「足利義満の公家化」を積極的に推進する勢力となる。その展開の種子が播かれたのである。

文和五（延文元・一三五六）年三月一日に広義門院寧子の近臣が女院から明かされた心事を書き留めた記録がある。<sup>⑩</sup>女院は、後光厳天皇がその退位後に依るべき所領がないことに悩んでいた。自らの一期分所領のうち、光明上皇が未来領主になっていたが伝領を断つたものを後光厳に伝えることを考えていた。女院は「天野殿（光厳上皇）」の「御時宜不快」であるため、この案を提案できないでいる、と語った。光厳の後光厳に対する逆鱗は解けておらず、退位後の処遇を定めることもできない状態だった。ましてや、後光厳天皇の血筋が皇位を継承してゆくなどということは、

完全に論外の状況だった。

延文二(一三五七)年二月一八日に光厳上皇・崇光上皇が帰京した。広義門院は直ちに調整を開始し、<sup>(11)</sup>光厳・後光厳の承認を得て長講堂領を崇光上皇の手に委ねた。直仁廃太子も同時に帰京したが、『園太暦』延文三年九月四日条に「入道宮」として出現する。登極の可能性が最も高かった人であるから、在俗のままでは南朝側も直仁を釈放しにくかったのではあるまいか。直仁は帰京のとき既に入道しており、皇位継承問題から身を引いていたとみて良いと思われる。これが崇光流と後光厳流との対立となった由縁である。

<sup>(12)</sup>崇光上皇は延文二年七月半ばから長講堂にて祭祀を執行しており、明くる延文三年三月一三日には後白河上皇祥月命日の仏事を長講堂で執行した。『愚管記』に「仙洞(崇光上皇)御幸六条殿、有御経供養(御八講近年中絶了)」とある。後光厳の登極以来中絶していた祖先祭祀が再開されたということがわかる。崇光を「正嫡」としてその子孫を皇位につけ、皇位と家産の分裂を避ける戦略が選択されたものと推断される。

<sup>(13)</sup>しかし、この戦略を立てた広義門院は延文二年閏七月に没した。崇光の子孫に皇位を伝える戦略は、後光厳天皇の近臣たちによる巻き返しに遭って葬り去られる。

光厳上皇・崇光上皇が帰京した延文二(一三五七)年二月当時、足利義詮の妾紀良子が懐妊していた。これより前、義詮の正室涉

川幸子の産んだ長子千寿王丸が文和四(一三五五)年に没していた。<sup>(14)</sup>延文二年五月五日に良子が産んだ男子は夭折したようだが、成長すれば義詮の後継者となる可能性があった。良子は間もなく再び懐妊し、翌延文三年八月二二日に足利義満を産んだ。<sup>(15)</sup>さらに、貞治三(一三六四)年には満詮を産んでいる。<sup>(16)</sup>良子の所生男子の何れかが成長して、武家首班となる現実性があった。<sup>(17)</sup>

同じ頃、紀良子の姉である後光厳天皇の女官仲子(崇賢門院)<sup>(18)</sup>も懐妊していた。義満誕生の四ヶ月後、延文三年二月一二日に義満の従弟緒仁王(後円融天皇)を産む。<sup>(19)</sup>

後光厳の女官の筆頭者日野宣子は、後光厳(弥仁王)の乳人日野資名の女子で、後光厳の乳姉妹にあたる。<sup>(20)</sup>宣子の姪にあたる日野時子(時光女)が後光厳天皇の典侍になっている。<sup>(21)</sup>宣子は当初、時子所生の皇子を通じて日野家と皇家との結びつきを強める策を考えていたと思われる。しかしながら、時子が皇女しか産まなかったこと、皇位が崇光流に継承される趨勢が顕れてきたことから、宣子は戦略を転換したらしい。

後光厳天皇はがんらい皇位継承候補の列にあらず、登極後も中継ぎの地位に甘んじていた。武家の後継者足利義満の従弟にあたる皇子緒仁王を得たことで、俄然、局面を打開する決定的な切り札を手にした。とはいえ、緒仁の生母仲子(崇賢門院)は石清水祀官善法寺通清の女子とみられ、その出自は卑賤である。これが緒仁王を皇儲とするうえで最大の障碍であった。このため、仲子

を後光厳の蔵人頭を務めた広橋兼綱の猶子にする策がとられた<sup>(22)</sup>。  
兼綱は足利義満誕生の一〇日前、八月一二日に権中納言となり、<sup>(23)</sup>  
緒仁王は同年二月一二日に公卿（兼綱）の女子（仲子）を生母  
として誕生した。

とはいえ、長講堂領以下の持明院統の家産はなお崇光上皇の手  
にある。後光厳天皇の血筋が皇位を継承してゆくということは、  
長講堂領以下を崇光流の手から奪って後光厳流の手中に移すとい  
う重大な難問を、現実政治の日程にのぼらせることを意味してい  
た。

#### 【光厳上皇置文と長講堂領の処分】

貞治二（一三六三）年四月、光厳上皇は後光厳流と崇光流との  
関係を規定する「讓状」（置文）を制定した。これは正文・案文と  
もに現存しないが、要旨は崇光上皇の孫にあたる伏見宮貞成親王  
の著作『椿葉記』<sup>(24)</sup>にみえる。①崇光上皇の皇子栄仁親王が踐祚す  
るならば崇光流が長講堂領以下を相伝する。②両統が交互に皇位  
を継承する場合にも崇光流が長講堂領以下を相伝する。③後光厳  
流が皇位を継承する場合には後光厳流が長講堂領以下を相伝する。  
④③の場合でも、長講堂領のうち伏見荘に限っては崇光流が相伝  
する。⑤室町院領は直仁親王の一期分として、その没後は「宗領」  
へ返付する。以上である。

『椿葉記』はこの文書のことを「置文」と記し、法的拘束力の

ない族内制規と位置づけている。『後光厳天皇日記』をみると、後  
光厳はこれを「讓状」と記しており、<sup>(25)</sup>長講堂領以下を後光厳流に  
伝える証文とみなしている。「讓状」の正文は後光厳天皇に授けら  
れており、後光厳天皇側に有利な証文であったことが推測される。  
光厳上皇は、足利義満と緒仁王の成長をみて、後光厳流への皇位  
継承を受け容れるに至ったのであろう。

焦点は、第一に、後光厳流と崇光流の何れが皇位を継承するの  
かという点にあり、第二に、崇光上皇の没後、長講堂領の帰属を  
決定しなければならぬという点にあった。進行は緩慢だが、い  
ずれも回避できない問題であり、政治史の展開を規定する条件と  
なっていた。

皇位継承については、後光厳天皇から弥仁王（後円融）への譲  
位が問題となった応安三年八月から同四年三月にかけての時期、  
後円融天皇から皇子幹仁王（後小松天皇）への譲位が問題となっ  
た永徳元年一月から永徳三年一月にかけての時期、という、  
二段階で葛藤があった。何れも、武家が後光厳流を支持したこと  
で決着がついている。

前者は『後光厳天皇日記』応安三（一三七〇）年記に詳しい。<sup>(26)</sup>  
天皇は八月一七日に勅使柳原忠光を細川頼之に遣わして譲位の内  
意を伝え、同月晦日に譲位を公式に受け容れる武家「申詞」が進  
上された。九月二日、天皇が万里小路嗣房を勧修寺経頭に遣わし  
て「申詞」を示すと、経頭はこれを崇光上皇に報告し、上皇側の

巻き返しが始まった。

勸修寺経頭は建武四年に光厳上皇が直仁を光明天皇の皇太子に立てようとした際にこれを諫止し、興仁（崇光天皇）を立太子させた経緯がある。<sup>(27)</sup>のち、崇光流の貞成親王は『椿葉記』のなかで、「勸修寺故内府（経頭卿）、光厳院の寵臣にてありし、其子孫当中納言経成卿に至まで、御心さしを存する人也」<sup>(28)</sup>と記している。経頭以降、曾孫の経成（経興）に至るまで崇光流に忠実と評価している。応安三年の対立の時も、経頭が崇光上皇を促して後円融への譲位に反対させ、栄仁登極を働きかけさせたとみられる。

崇光上皇は当初、大覚寺統・持明院統の皇位継承争いの再現を避けよという光厳上皇の遺戒に配慮していた。<sup>(29)</sup>しかしながら、幕府は後光厳の「聖断」を盾にとって崇光の希望を容れなかった。一月三日、崇光は、崇光流を「正統」、後光厳流を「庶子」とする、決定的な対立をきたす主張を提起して栄仁親王の登極を迫った。<sup>(30)</sup>翌年の『後愚昧記』応安四（一三七一）年三月一六日条に「大礼事、自院（崇光上皇）於武家被支之間、未落居」とある。崇光側の抵抗は同月二三日に譲位が実行される直前まで続けられた。さて、応安三年一月三日、崇光上皇は、崇光流を「正統」、後光厳流を「庶子」とする宸筆折紙を記し、武者小路教光に託して細川頼之のもとに遣わした。興味深いことに、頼之は機転を利かせてこの折紙を教光から巻き上げ、天皇に進上したことがわかる。

史料③『後光厳天皇日記』応安三年一月三日条<sup>(31)</sup>

後日以頼之演説、或者語之、仍記之、勅使（教光）、自懷中取出、一々講尺之了、頼之云、是ハ宸筆候哉らん、勅使云、さこそ御、さ候ハ々、未拜見、ちと拜領候ハんとて懷中、勅使有迷惑之氣云々、以之沙汰二逢候ハんとも、披露候ハんとも不申、無何抑留も聊爾歟

細川頼之は武者小路教光に対して「是ハ宸筆候哉らん」と問い、教光は「さこそ御（おはす）」と答えた。頼之はまだ上皇の宸筆を拝見したことがないと称してこの折紙を手に取り、そのまま説明もなく懷にしまい込んでしまった。教光は驚き困惑したが頼之は取り合わず、教光を退出させたらうで三宝院光濟を呼び、天皇のもとに遣わした。<sup>(32)</sup>天皇も「無何抑留も聊爾歟」と評して、頼之のやり方に苦笑している風情である。頼之が天皇と協調して緒仁王（後円融）の登極を推進する立場に立っていたことが分かる。

このような頼之の態度について、幕府内部には疑念をもつむきがあった。斯波義将を中心とする反対勢力が想定される。頼之は一〇月一日、反対派を説得する材料にするため、天皇に奏請して貞治二年光厳上皇「讓状」を閲覧し、校正案文を作成したらしい。『後光厳天皇日記』応安三年一〇月一日条には、<sup>(33)</sup>閲覧希望の理由として次のようにある。讓位について聖断に随うということは「正理勿論」ではあるが、現在は「武將幼主」のため「大方（義満准

母」・渋川幸子が政務を決裁している状態である。その渋川幸子や諸大名が事情に疎いたため、「偏頼之以未尽事、称（被申）公家最賈之由」、つまり頼之が不当に天皇を「最賈」していると難じておられる。ここで、幸いにも光厳上皇の遺詔があるということなので、これを証拠として幸子たちを説得したい、と要望した。後光厳はこれに応え、勅使柳原忠光の報告から、頼之が閲覧したうえで校正文を作ったらしいと推測している。この時、後光厳から後円融への讓位問題が長講堂領の伝領問題と密接不可分に結びついていくということ、幕府側でも明確に認識したとみて良い。

この問題は、後小松天皇の登極に際して、後円融天皇と足利義満との間でも協議された。『後円融天皇日記』永徳元年一月三〇日条に、讓位を發意した後円融天皇が義満にこの文書を見せて、長講堂領の処分を求めた記事がある。

史料④『後円融天皇日記』永徳元（二三八）年一月三〇日条<sup>34</sup>

（前略）七仏薬師法今日結願也、仍為聽聞武家（足利義満）晚頭参、召垣（恒）所（衣冠・上括）、傍更無人、（虫損）申事有之由命、仍進朕前、仰云、凡旧院（後光厳上皇）御一流事、先年委被仰武家き、定存知歟、只無何非被仰分、光厳院如此被申置旧院了、（御自筆重書、予懷中取出令見之、委読聞之）、仙洞御管領已後、御領等可為御進止之旨被申之上者、始終御一流相統無異論歟、而仙洞（崇光上皇）御訴訟、如何にも不

可断絶歟、殊為存知猶如此仰置者也、又朕進退事、非不審之限歟、且連枝等とかく各入室諸門、今一兩人相残、朕進退事も能々可存知者、有承諾之氣

後円融天皇は宮中祈禱に参仕した足利義満を御前に召し、人私いをしたうえでだんの貞治二年光厳上皇「讓狀」を示し、自ら読み上げたうえで次のように述べた。「仙洞（崇光上皇）御管領已後」、つまり崇光上皇の死没後、長講堂領以下の「御領」については、（当時の天皇である）後光厳天皇の「御進止」となさるようにと光厳上皇が（いま示したところの貞治二年「讓狀」の中で）「被申」ている。よって、後光厳の子孫である自分たちが長講堂領以下の「御領」を支配することには異論の余地なき正当性がある。しかしながら、崇光上皇の「御訴訟」が「断絶」するとも思われない。義満側でもこの事情を特別に重視して認識しておいてもらいたい。故に、ことさらに「仰置」くのである。この他にも讓位後の進退について後円融から仰せを受け、義満には「承諾之氣」があった、とある。

後円融天皇は義満に対して、崇光上皇の没後、長講堂領を没収して後光厳流（実質的には後小松天皇）に移管せよと要求している。崇光流の栄仁親王は既に三〇歳を超えているから、幼い後小松が登極すれば皇位継承から決定的に突き放される。故に、「内裏小番」が制定される永徳年間という時期は、皇位継承の帰趨がほ



ぼ決し、長講堂領の没収が具体的な政治日程にのぼる転換期だったといえる。のち崇光上皇の死没直後、義満は長講堂領以下を没収して後小松天皇に移す。そこに至る過程の始まりなのであった。

### 【後小松天皇の登極と「内裏小番」】

後小松天皇は永徳二年四月一日、六歳で踐祚し、同年一二月二八日即位式を行った。<sup>(36)</sup> 明くる永徳三年二月、後円融上皇が後小松の生母三条厳子を傷害する事件が起きたが、<sup>(37)</sup> 混乱は間もなく収拾され、大嘗会の準備は四月二五日の大嘗会国郡卜定を皮切りとして再興された。五月二六日大嘗会行事所始、<sup>(39)</sup> 八月四日御禊定が行われ、大嘗会は一月一六日に実施された。<sup>(41)</sup> 後小松天皇の「内裏小番」が出現するのは同年六月初めのことで、制定は大嘗会行事所始の前後と考えられる。のち、後花園天皇（一〇歳）の登極に際しては、大嘗会国郡卜定が行われた永享二（一四三〇）年四月二三日に小番結改が行われる。<sup>(42)</sup> いずれの場合も、登極儀礼との関係で「内裏小番」が制定・改編されたと思われる。後小松の場合には、崇光流との潜在的な緊張があった。後花園は崇光流の血をひいており、称光天皇が没して後光厳流が断絶したことにより踐祚した。いずれの場合も、天皇の地位に関わる潜在的な対立があったことになろう。小番衆の機能に関わる事情と言える。

史料⑤―i『吉田家日次記』永徳三（一三八三）年六月二日条<sup>(43)</sup>

予（吉田兼敦）詣准槐（万里小路）、父子（万里小路仲房・嗣房）被出対雑談、内裏小番事、自室町殿（左大臣足利義満）厳密御沙汰、即今日丞相（足利義満）御参内、昼夜御祇候、翌朝午刻御退出

史料⑤―ii『吉田家日次記』永徳三年六月二六日条

左大臣殿（一上）（足利義満）、自今朝御祇候、今日為御番云々

史料⑤―iii『吉田家日次記』永徳三年七月一〇日条

今日、准后（足利義満）御参 内、昼夜御祇候、中山中納言（中山親雅）当番也、翌朝午刻准后御退出云々、厳密之儀也

史料⑤―iをみたい。永徳三年六月二日、摂政二条良基の家司を務めていた吉田兼熙の子兼敦は伝奏万里小路嗣房の邸を訪ねた。嗣房およびその父万里小路仲房と対面した。二人から、足利義満が廷臣たちに対して「内裏小番」への参勤を命じたということを聞かされた。この日、義満自身が内裏に宿直して「昼夜御祇候、翌朝午刻御退出」の予定であるということだった、とある。史料⑤―ii同年六月二六日条には、この日が義満の当番日である、とみえる。史料⑤―iii同年七月一〇日条には、この日は現任の権中納言である中山親雅の「当番」日であったが、義満が番代として宿直した、と記されている。

よって、永徳三年に制定された「内裏小番」には、左大臣足利義満をはじめとして現役の公卿たちも結番されていたことがわかる。のち、禁裏小番は殿上人の役とみなされるけれど、後掲の史料⑦には応永一三年に現任の参議清閑寺家房が番衆としてあらわれ、『看聞日記』応永二三年六月二〇日条には田向長資の「禁裏小番相手」として前権中納言四条隆直の名があり、『薩戒記』永享二（一四三〇）年四月二三日条にみえる小番結改通知は、「番頭」である現任の権中納言西園寺実光を経て現任の参議中山定親に通達された。禁裏小番が純粹に殿上人に限られるのはやや後のことと考えられる。

小川剛生氏は史料⑤ i・ii・iiiを小番衆制度の初見と指摘されており、確かにこれ以前にはみえない。『後光厳天皇日記』応安三年九月二四日条に宿直の<sup>(45)</sup>廷臣「学窓人」がみえ、「学問所番」かと思しいが「小番」の称はない。武家邸で一昼夜の宿直を務める奉公衆の「小番衆」が一般御家人の「大番衆」（長日門役）の対語とみられることを勘案すると、「内裏小番」は「大番」の対として武家の発想で命名されたと思われる。

明石治郎氏の研究によれば、足利義満期以降の禁裏小番は「天皇の近辺や内侍所など内裏の警衛にあたる殿上人の役」で、仙洞小番もほぼ同断。五ないし一〇番に結ばれて各数名が所属し、一〇日おき月三回、束帯を着して一昼夜殿上に輪番で祇候するといふ。結改や祇候命令は武家首班の命を伝奏奉書により通達したと

いう。史料⑤ i・ii・iiiには伝奏の介在を明示する記述はないが、使用された可能性は排除できない。後述するところ、義満の仰せを奉じる伝奏奉書が出現するのは明徳四（一三九三）年である。永徳三年においては、後円融上皇の「新院御気色」を下達する院宣であつたとみて良い。

史料⑤ i に「自室町殿嚴密御沙汰」とあるように、義満の発案とみられる。足利義満が武家首班として公家に申し入れる「武家執奏」の手続きを践んだのか、左大臣の立場で後円融上皇に「沙汰」し発令したのか、いずれかは分からない。後述するように、この時期の義満は後円融上皇と摂政二条良基の間にあつて、「内覧」として日常的に朝廷政務に関与していた。義満自身が小番衆に結番されているのだから、少なくとも後円融の決裁後の関与は「内覧」・左大臣としての関与とみて良からう。義満の伝奏に対する指揮権は、まだ後円融上皇から切り離されてはいない。永徳三年の状況を「武家が伝奏を介して小番衆を指揮した」と定義することはできないのではないかと思われる。

『兼宣公記』の「当番」参内記事は、至徳四（嘉慶元・一三八七）年正月二七日、嘉慶二年二月二七日・八月一七日、康応元（二三八九）年正月一七日・二月七日、明徳二（二二九二）年正月二七日の各日条にあり、七のつく日、一〇日おき月三回と推定される。『教言卿記』応永一三年記にみえる教言子息教興の参勤日は、三のつく日、月三回である。永徳三年に義満が設定した小番の制度が継

続しているとみられ、恐らく永徳三年から一〇日おき月三回勤仕が定例であったとみて良からう。よって、史料⑤ i・iiにみえる義満の参勤日、六月二日・二六日は、一〇日おき月三回のルールからみて変則と言える。

史料⑤ iiiには、義満が権中納言中山親雅の「番代」を務めたという記事がある。左大臣が権中納言の番代を務めるというのは、奇妙な話である。後世の実情では、支障の生じた番衆が自発的に親しい者に依頼して代官を立てている。この場合、卑官の親雅が主体的に上官の義満に代理を依頼し、義満の応諾を得たということとは考えにくい。

『後愚昧記』永徳元年八月五日条に、武家邸の申次について「丞相以後、教冬朝臣・教遠朝臣（山科教冬・教遠）等、結番申次之」とある。同年七月二三日に義満が内大臣に任官したのち、公家来訪者を接遇する武家邸の申次は公家衆の家札が担当する制になっていたのである。『吉田家日次記』永徳三年六月九日条に「今朝大納言殿（万里小路嗣房）、参室町殿（左府）被伺申、即被下御点、以中山中納言（親雅）伺申云々」とある。小番の制が始まった頃、中山親雅は義満邸で「申次」を務めていたことがわかる。『至徳二年記』（『春日権神主師盛記』至徳二（一三八五）年六月二九日条に<sup>(48)</sup>「中山殿（親雅）ニハ御所ノ此旬ハ御申次番」とあるので、「申次番」は旬間交替の定めであったことが知られる。小番は一〇日おき月三回、二四時間勤務の制であるから、武家邸の「申次」を務

める者は、少なくとも月に一回欠勤することが避けられない。必ずしも義満自身が代官を務めなければならなかったとも思えないが、内裏小番も武家邸「申次」も制度の初期期であったため、親雅の小番欠勤を嫌った義満が自ら番代を買って出たと考えて良いのではなからうか。

吉田兼敦が番代を務める義満の挙動を評して「厳密之儀也」と記した理由は、小番の制を定めた義満が自ら番代を務めるなど、率先垂範して番衆の精勤を求めたことを言っていると思われる。当番日ではないとみられる六月二日に義満が出仕した理由も、番衆を督励するため当番日以外に出仕したものではあるまいか。小番衆出仕の初日だったのかもしれない。

義満が主導的に制定し、率先参役して廷臣に精勤を求めたことがわかる。大臣以下の現役廷臣を結番した構成を含めて、その意味はどこに求められるのだろうか。

【持明院統の分裂と「足利義満の公家化」】

『椿葉記』は崇光上皇の孫にあたる伏見宮貞成親王の著作で、実子の後花園天皇に対して崇光流の正統性を伝えようとしたものである。崇光と長講堂領との関係について次のように記す。

史料⑥『椿葉記』<sup>(49)</sup>

抑長講堂領・法金剛院領・熱田社領・同別納・播磨国衛・同

別納等は、後深草院以来正統につたはる。然は〔光厳院〕法皇の御譲を受て、上皇（崇光上皇）御管領あり。御堂御領知行する諸家、みなこの院（崇光上皇）に奉公す

長講堂領は後深草天皇以来、持明院統の「正統」が継承してきた。そこで、「正統」である崇光上皇が光厳上皇の譲りを受けて管領した。このため、長講堂などの持明院統所領の領家職などを知行している廷臣たちは、みな崇光上皇に奉公していた、とある。

『椿葉記』は観応以前の実態を隠蔽している。既述の史料①康永二年光厳上皇置文によれば、光厳上皇は直仁を正嫡とし、崇光を中継ぎに定めていた。崇光流を「正統」とする主張は、応安三年一月に初めて現れる。光厳上皇は長講堂領以下の支配権を直仁親王に与える予定で、崇光には一期分しか授けるつもりがなかった。長講堂領に対する支配権が「〔光厳院〕法皇の御譲」によるという主張は、延文二年の広義門院の調整によつて崇光上皇が長講堂領以下の支配権を得たあとになって、はじめて出現しえた主張である。

とはいえ、皇位継承が問題になった応安から永徳頃、長講堂領以下の領家職等を知行する廷臣たちは「みなこの院（崇光上皇）に奉公す」る状態であつたと考えて良い。後光厳天皇の禁裏御料所の規模は正確には分からないが<sup>(50)</sup>大きくはなかった。後光厳流が所領面から廷臣たちに及ぼす支配力は小さく、崇光上皇に太刀打

ちできる状態ではなかった。

既に述べたように、後光厳の登極は光厳上皇の意思に反するものであり、これは廷臣たちにとって周知の事実であつた。広橋仲子所生の後円融天皇は後光厳流の切り札ではあつたが、仲子の出自の低さも廷臣たちにとっては周知の事実であつた。これらを勘案すると、長講堂領の領家職以下を知行する廷臣たちが、崇光上皇の血筋から長講堂領以下をとりあげて後光厳流に引き渡すという立場をとることは、困難をはらむものであつたとみられる。

『後愚昧記』永徳元年七月七日条をみると、「毘沙門堂門室安堵事、就長講堂御管領、被下院宣（崇光上皇院宣）之条為先規」とある。長講堂を本所・本寺とする所領・寺院に関する異動は、崇光上皇院宣によつてのみ発令せられる。これは後円融天皇の岳父で、後小松天皇の外祖父であつた三条公忠の場合でも、逃れられないことだつた。

公忠はこのとき崇光上皇の院「執権」葉室長頭に院宣の発行を申請しようとして断られ、「院中奉行」の四条隆持に依頼するよう助言された。四条隆持（永徳三年没）の子隆仲は崇光流への忠勤を貫いた側近で、その子孫は長講堂領の没収後は零落する<sup>(51)</sup>。葉室長頭が断つた理由は、崇光に対して「近日不可出仕之旨申入」れていたからだという。三条公忠は『後愚昧記』永徳二年九月十八日条に、「公家仁之中、違左府（足利義満）所存之人、西園寺前右府・久我大納言・葉室前大納言（長頭）云々」と記している。詳

細は分からないが、崇光上皇の執権だった葉室長頭は足利義満から圧迫を受けていたようである。このようにみると、永徳年間には、廷臣たちの行動に影響を与える新しい要因として、いわゆる「足利義満の公家化」が作用し始めていたのだということが言える。

後光厳流の有する政治的資産からみれば、崇光流から長講堂領を没収することは独力では完遂不可能な難事であったとみられる。いっぽう、「足利義満の公家化」、とりわけ多くの廷臣を家司・家礼に組織する主従制的支配の展開は、長講堂領を介する崇光流の廷臣支配を圧倒し、崇光上皇の側近にも影響を及ぼすようになっていたとみて良い。

「足利義満の公家化」は永和四（一三七八）年頃から始まり、日野・万里小路・勘解由小路（広橋）の三家が顕著な役割を果たした。日野家は後光厳の女官の筆頭者宣子の一門で、資教は後小松の乳人である。<sup>(53)</sup>万里小路仲房は二条良基のもとで頭弁として後光厳の登極儀礼を実施した。<sup>(54)</sup>子の嗣房も後光厳の近臣である。<sup>(55)</sup>勘解由小路（広橋）兼綱は後光厳踐祚と同時に蔵人頭となり、崇賢門院仲子の養父となる。<sup>(56)</sup>これらを考えると、「足利義満の公家化」は後光厳天皇の近臣たちに支えられたものだったと言える。これらの廷臣たちは、後光厳流皇統に奉仕する一貫性のもとで「足利義満の公家化」を支えたと解される。

以上を踏まえて、足利義満の設定した内裏小番を眺めてみると、

どうなるだろう。

少し時代が下るが、応永一三年正月二日、山科教言の子教興が「奉行東洞院入道一品（性光）（日野資教）御教書」によって「禁裏小番」に発令された。<sup>(57)</sup>日野資教は後小松天皇の乳人で、後円融上皇の院執権を務めた。万里小路嗣房と並んで「足利義満の仰せを奉じる伝奏奉書」出現期の奉者である。すでに出家しているから、伝奏として奉書を発行したとみて良い。これが、伝奏が小番衆を指揮した史料上の初見である。発令者は不明だが、義満とみて問題あるまい。後述するとおり、当時の義満は「治天の君」として振る舞っている。義満の立場は公家であり、「武家が伝奏を介して小番衆を指揮した」と定義することはできない。

史料⑦『教言卿記』応永一三年正月一三日条

倉部（山科教興）禁裏番始之間参勤、被召御前被下御盃、殊以祝着畏入々々、相番家房卿（参議清閑寺家房）・基秀朝臣（園基秀）云々

「禁裏小番」初出仕の日の記事である。教興は禁裏に出仕して後小松天皇の御前に召され、「御盃」を頂戴した。父教言は「殊以祝着畏入々々」と記しており、たいへんに喜んでるように思われる。小番衆と後小松天皇自身との人的な接触は親密であり、小番衆が天皇の近臣を造成する受け皿であるという指摘は適切である

ように思われる。

崇光上皇の廷臣支配が「足利義満の公家化」によって圧倒されたとしても、廷臣たちが後小松天皇を支える関係に組み込まれたということにはならない。永徳三年に創設された内裏小番に特徴的な事象は、左大臣・権中納言という現役の公卿が結番されている事実である。単なる近臣造成にとどまらず、廷臣全体を後小松天皇と直接的に結びつける狙いによって制定された制度であったと断定して良いだろう。

既にみたとおり、後円融天皇は讓位に関連して長講堂領以下を後小松天皇に移管することを義満に迫っている。義満が同意しても廷臣たちが同意しなければ実現は難しい。廷臣たちを崇光上皇から切り離すだけでなく、後小松天皇に強く結びつけなければならぬ。このようにみると、永徳三年の内裏小番は、持明院統の分裂を後光厳流の継統という方向で收拾するための施策のひとつであったと理解して良からう。廷臣たちを後光厳流の皇位継承者後小松天皇と直接のかつ強固に結びつけて、崇光流皇統を破滅に追い込む結果になる長講堂領の没収を実施する際に、その同意を確保する狙いだったと思われる。

「内裏小番」の発足から二ヶ月後、『吉田家日次記』永徳三年八月一日条によれば、西園寺実俊は後小松の大嘗会の準備を指して、「今度非朝儀、為准后（足利義満）御沙汰間、弥不及一言」と述べたという。義満は同年六月二六日准三宮を宣下されている。<sup>(58)</sup>

この言明は、後小松の大嘗会が朝廷の行事ではなく、義満の行事だという意味になる。以前、この言明を捉えて義満に対する非難のニュアンスがあると述べたことがあるが、<sup>(59)</sup>認識不足であった。後円融の従兄である足利義満が従弟後円融の皇子後小松天皇を助けるということを、他人の立場から非難するということは、困難なではなからうか。

実俊の批判の根元は、後光厳流にはがんらい皇位継承の正統性がないという点にあったと考えてはどうであろうか。持明院統では後伏見・花園兄弟、光厳・光明兄弟の各世代において、弟が中継ぎとなつて兄の血筋の継統を支える慣行が行われていた。広義門院が長講堂領を後光厳に与えず崇光のために確保したのも、この慣行に基づいて後光厳に中継ぎを務めさせる意図があったからだと考えられる。ところが、後光厳流はこの慣行に逆らつて兄崇光の血筋を斥けようとし、反発と不信の苗床を培つていったのだと思われる。

後光厳流が崇光流を圧迫しているという構図になることを避けるのが、政治的に賢明なやり方というものだろう。そのためにこそ、後小松の大嘗会は足利義満の「御沙汰」として推進されたと考えて良いのではあるまいか。後小松と廷臣たちとを結びつける「内裏小番」の実現・励行が、義満によって推進されたのもこの文脈に位置づけると辻褄が合う。後述するように、長講堂領の移管が実現する時期、後小松天皇は義満に政務の全権を委任してい

た。これも同断である。足利義満の介在は、崇光上皇や廷臣たちの後光厳流に対する反発と抵抗を麻痺させるうえで、有効かつ決定的な条件であったと考えられる。

## 第二章 足利義満と伝奏

### 【後円融院政と足利義満】

内裏小番の編成は永徳三年六月初めだが、その直前の同年二月、後円融上皇が後小松天皇の生母三条厳子（通陽門院）を刃傷する事件が起こった。<sup>(61)</sup> 今谷明氏の著書『室町の王権』<sup>(62)</sup>のなかで取り上げられ、注目を集めた。今谷氏はこの葛藤を「王権を武家の手に奪取しようとする義満」<sup>(63)</sup>に対する後円融上皇の抵抗と位置づけた。義満が後光厳流皇統を支える立場で行動していた、とみる本稿の解釈とは対立する。

今谷氏は、後小松天皇の踐祚以後、摂政となった二条良基が義満と協議して後小松天皇の即位式（永徳二年二月二十八日）の日取りを決定した事実注目された。「上皇の勅許なきまま即位の日程を決めてしまった。將軍と摂政が手を組んでいては、治天といえども手の出しようがない」<sup>(64)</sup>と指摘され、二条良基が「義満の肩入れに努めた」<sup>(65)</sup>ために義満の王権奪取が可能になったと評価された。良基と義満との間に協議があったことは事実だが、二人が後小松天皇のために協調していることもまた紛れもない事実である。

王権奪取という解釈は、必ずしも裏付けられているとは言えないように思う。

百瀬今朝雄氏は講演「二条良基書状」<sup>(66)</sup>のなかで、後光厳上皇が没した直後、親政を行おうとした後円融天皇と関白として政務を握ろうとした二条良基とが対立した事実を指摘されている。良基は幕府の支持を取り付けていたが、後円融に阻まれたという。<sup>(67)</sup>

永徳二年四月一日に後円融が後小松に譲位すると、良基は摂政になり「…之由、摂政殿御消息所候也」という書き止め文言を持つ藏人の奉じる御教書を発給し始めた。これは摂政政務の際に現れる「綸旨」と呼ばれる文書で、『後愚昧記』同年四月十九日・五月一三日条・『吉田家日次記』永徳三年六月五日・一九日条にある。後小松の踐祚に伴い、良基が摂政政務を開始し、院政を志向する後円融上皇との間に葛藤が生じたとみられる。

今谷氏の注目された、良基が義満と協議して即位式の日取りを決めたという事実は、院政と摂政政務との葛藤に関わる現象なのではあるまいか。『後愚昧記』永徳二年九月一八日条より、良基が義満と協議しながら後小松の即位式の準備に着手したことがわかる。同記同年一〇月二五日条には「今度仙洞御即位事、更無御口入之儀」とあり、後円融が即位式の準備に背を向けたことが知られる。その理由について、三条公忠は「直与摂政談合、可遂行之条、落居之故也」と記す。後円融は、義満が自分を差し置いて良基とばかり協議していることに立腹していたらしい。このように

みると、主たる対立は、後円融と義満との間ではなく、後円融と良基との間にあったと考えるのが妥当かと思われる。

永徳三年二月の三条厳子刃傷事件が收拾されたあと、左大臣であつた義満が「内覧」となつて、後円融と良基との間に介在して調整する状態になっていることがわかる。

史料⑧『吉田家日次記』永徳三（一三八三）年七月二十五日条

入夜、中御門宰相（中御門宣方）来臨、放生会参行（ママ参向）事、被仰下之間辞申、（室町殿（足利義満））時議如何、不審被尋仰奉行（権弁（権右少弁日野町資藤））可承云々、仍予詣日野前大納言（土御門保光）尋申、則被招引権弁、相尋之处、室町殿仰云、自 仙洞此事一向為内覧可有申御沙汰之由被申、則被思渉、伝 奏事、被仰中御門了、上卿事故障勿論事也、而自仙洞於伝 奏者可被定仰、於上卿・弁者可被申 准后者、 准后申御沙汰不可叶、一向可為仙洞之御沙汰之由、被申入云々、仍於今者、 准后不可有御口入、此分可申入 仙洞也云々、中相公被安堵了、被出一献了

中御門宣方が吉田兼熙邸に来訪して云うことには、石清水放生会伝奏に任じられたのだが、石清水放生会に上卿として参向せよという命令も来てしまい、当惑している。さしあたり上卿参向を断つたのだが、かく拒否したことで「室町殿」足利義満の怒りを

買うようなことにならないかと心配している。奉行である日野町資藤に尋ねてみてはもらえまいか、ということだった。土御門保光は資藤・資衡兄弟の伯父で後見人だった。<sup>(68)</sup> 兼熙の子息兼敦は保光を訪ねて、資藤を呼び出してもらつた。資藤が云うには、「義満の言明によると、後円融上皇の仰せで石清水放生会の遂行については義満が『内覧』として万事取り仕切るように、と命じられた。そこで、義満は宣方に石清水伝奏を命じた。宣方が上卿参向を断つたのは当然である。ところが、そのあと上皇から『伝奏の人事については上皇が定めるけれど、上卿・弁については義満から准后である摂政二条良基に伝えて決裁を求めるように』との命を受けた。そこで義満が二条良基にこれを伝えたところ、良基は『自分が申沙汰することはできない、すべて上皇がお決めになるように』と義満に回答した。今となつては良基がこの件について『御口入』するということはなくなった。よつて、そのことを資藤から上皇に報告せよ、と義満から命じられた」ということであつた。義満の怒りに触れることはないと分かつた宣方は喜んで、一献料を差し出した、と記されている。

宣方に上卿参向を命じたのが誰かは明記されていないが、宣方を伝奏に定めた義満ではあるまい。義満に「申御沙汰不可叶」と回答した良基でもなからう。いったん義満に「一向為内覧可有申御沙汰」きことを命じた上皇自身が、前言を翻して自ら宣方に上卿参向を命じ、混乱が生じたのではあるまいか。上皇は良基に収



拾させようとしたが断られ、結局、自分の出した宣方への上卿参向命令を撤回しなければならなかったかと思しい。

伝奏については義満が「申御沙汰」して後円融が「定仰」せる体制であった。後円融は「内覧」として申沙汰せよと命じており、義満の地位は「内覧」だったことがわかる。

『吉田家日次記』永徳三年六月四日・五日条によると、吉田社神宝盗失に関する御占を奉行日野町資藤が担当することになり、六月四日に摂政二条良基に勘進日時を報告した。良基は資藤に対して義満に相談するよう命じた。良基は資藤に対して、「内覧候へハ可申合之由承候」と良基から指示されたということを義満に説明せよと伝えている。良基も義満のことを「内覧」と認識していたのである。五日には義満が了承した旨の報告があり、「依摂政殿御気色執啓如件」という書き止め文言の「綸旨」が作られた。この際に、良基は資藤に対して「仙洞へも如此治定のよし、以便宜申され候へく候」と指示している。良基・義満の協議が決着した後、後円融上皇に報告するルールになっていたらしい。

後円融上皇の院政と二条良基の摂政政務とは、「内覧」足利義満を仲立ちとして結びつき、上皇に疎外感を味わわせないよう配慮がなされているように思われる。義満と後円融との対立は解消しているとみて良いのではなからうか。この一種の二頭制は、同年二月の紛議が収拾される過程でできたものであろう。「内覧」義満は二頭制のカナメであった。義満の地位は重要だが、良基は義満

と協議したうえで自立的に摂政綸旨を発行しており、義満が摂政政務を否定しているわけではない。伝奏の人事も義満の「申沙汰」をうけて後円融上皇が「仰定」める関係であり、義満が自由に伝奏を指揮しているとは言い難い。

後小松天皇の「内裏小番」は上記の二頭体制のもとで、足利義満が主導する形で設定された。後円融上皇の院政と二条良基の摂政政務の双方から承認を受けて設定されたと考えられる。後円融上皇も二条良基も後光厳流の継統を推進する立場であったから、「内裏小番」は後光厳流の地位を強化する施策として実施されたと推断して良いと思われる。

#### 【義満の仰せを奉じる伝奏奉書の出現】

「足利義満の仰せを奉じる伝奏奉書」は、義満が実質的に「治天の君」の位置を占めたことを明示する史料であり、義満が朝廷の支配権を奪取したことを示す事象として理解されてきた。本稿で述べている推論とは対立する面があるので、再検討を試みたい。

まず、足利義満の仰せを奉じる伝奏奉書がいつ出現するのかという問題を調べてみる。

研究の草分けである伊藤喜良氏は応永二（一三九五）年四月一七日、興福寺・春日社に大和国宇智郡を寄進する義満の命を南都伝奏万里小路嗣房の奉書で施行した事実を指摘された。<sup>(69)</sup>小川信は初見を応永元年に引き上げられた。<sup>(70)</sup>

佐藤進一氏は、義満が応永二年六月二〇日に出家したあと、「世俗の規範を脱することができ」<sup>(71)</sup>るようになったとされ、法皇のよりに振る舞う根拠を出家に求める考えを示された。佐藤氏自身は伝奏奉書に注意を向けておられるわけではないが、伝奏奉書の掌握が「法皇」としての挙動に通じるところから、その後しばらく、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」の増加を出家による朝廷政務規律の超克として捉える見方が広く受け入れられた。

これに対して、富田正弘氏は明徳四（一三九三）年四月二十六日に後円融上皇が没した事実<sup>(72)</sup>に注意を向けられ、「後円融院政の終焉をもって、本来の意味での王権を獲得」したとされた。義満の「院政」と見なして、後円融院政から義満の「院政」への移行を想定されたのである。

転換の性質を知るためには、転換点を見極めることが大切である。「義満の仰せを奉じる伝奏の奉書」は、後円融上皇死没を契機としてあらわれると考えるので吟味したい。

史料⑨『賀茂社古代庄園御厨』<sup>(73)</sup>

当社領越中國寒江・倉垣両庄、被付社務候、可被□□之由、  
日野大納言（日野資教）殿御奉行所候也、仍執達如件

明徳四年七月十三日

右馬助範氏

謹上 鴨欄宜殿（見旧記）

史料⑨は、「日野大納言」資教の「御奉行」により鴨欄宜祐有に宛てて、越中國寒江・倉垣両庄を社務に与えることを通達する「右馬助範氏」署判奉書で、いわゆる「別形態の院宣」である。この場合「御奉行」する日野資教は奉者であり、真の発給者は別に存在する。資教は後小松天皇の乳人、後円融上皇の院執権であり、同年四月二十六日の後円融死没以前は、後円融上皇院宣の奉者を務めていた。時期の比較的近い、廬山寺長老宛明徳三（一三九二）年一月二日日野資教奉院宣は、「新院（後円融上皇）御気色」を奉じる通常の院宣<sup>(74)</sup>である。

史料⑨は後円融上皇の死没から三ヶ月後に出されたものである。存命する持明院統の上皇は崇光上皇だけだが、同じ時期に崇光の発給した院宣として明徳四年二月日に妙心寺無因に宛てたものがある。<sup>(75)</sup>崇光の院執権四条隆仲（隆持息）が奉じている。後光厳流の近臣である資教が、隆仲をさしおいて崇光の院宣を奉じることはないと思われる。

史料⑨に関連して、同月二二日に管領斯波義将が守護畠山基国に対して当該所領の遵行を命令した管領奉書<sup>(76)</sup>が伝わっており、史料⑨の真の発給者は足利義満とみて良い。小川信氏は、鴨社領越中國寒江・倉垣両庄に関する応永九年二月二五日の伝奏坊城俊任奉書が蔵人權右少弁葉室定頭と幕府奉行人斎藤玄輔に宛てられていることを指摘されて史料⑨との関連を考慮されている。命を受けた定頭は真の発給者を明示しない論旨に類似の奉書を発給して

おり、後任奉書は奉行を制御しているから伝奏奉書とみられる。

義満の命を下達して権限を付与する命令書には「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」、「義満の仰せを奉じる家礼の奉書」の両様がある。資教を含めて当時の伝奏はもれなく義満の家礼と思しいので、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」は「義満の仰せを奉じる家礼の奉書」に内包される部分集合となる。いわゆる「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」、「義満の仰せを奉じる家礼の奉書」は、基本的に真の発給者を明示せず、奉者の地位を明示することもない。史料の文言から弁別することは困難で、奉者が伝奏の肩書きを有するからということで弁別できるものでもない。<sup>(77)</sup>とはいえ、後円融の院宣を奉じていた日野資教が義満の仰せを下達しているという奉者の側の転換と、論所が以後、伝奏奉書によって裁かれるようになるという事情とを勘案すると、史料⑨を「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」と位置づけうる可能性はある。

「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」の確実な所見は翌応永元年(明德五年)に得られる。

史料⑩「寶鏡寺文書」<sup>(78)</sup>

「(端裏書) 御教書案 明德五(応永元年)」

江州船木庄御年貢内、毎年千五百疋、可被進女院之由、可申之旨被仰下候也、恐々謹言

三月二日

資教

#### 珠阿弥陀仏

史料⑩の資教奉書について、『大日本史料』の編者は「崇光上皇、院宣ヲ賜ヒ、珠阿弥陀仏ヲシテ、近江船木庄年貢ノ内、毎年千五百疋ヲ崇賢門院ニ進納セシメラル」という綱文を立てられた。皇室領「江州船木庄御年貢」を女院に進納する命令であることから発令者は有力な皇族と解される。後小松天皇綸旨を施行する文言はなく、存命・在京している上皇が崇光上皇・後龜山上皇だけであるところから、崇光上皇の院宣と解釈されたものと推察される。とはいえ、後光厳流の近臣である資教が崇光の院宣を奉じることはないと思われる。

「江州船木庄」は『後光厳天皇日記』応安三年九月四日条に天皇料所としてみえ、後光厳流の支配所領であった。当時存命の「女院」は後小松天皇の祖母崇賢門院だから、進納先からみても後光厳流の所領と解される。宛所の「珠阿弥陀仏」は足利義満の側近「古山珠阿弥陀仏」<sup>(80)</sup>の可能性がある。所領・進納先の性質、後小松綸旨の施行状でないことからみて、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」であることがほぼ確実と思われる。

重要なことは、『大日本史料』の編者が考えられたように、この時期に持明院統の皇室領を支配できるのは、後小松天皇以外では崇光上皇しかないはずだということである。史料⑩は、崇光上皇の院宣が発給されるのが当然である局面で発行され、崇光上皇

の院宣が果たしたであろう効果をこれに代わり發揮している。見逃せない問題である。

史料⑩に続いて、応永元年中に万里小路嗣房の奉書が顕れる。同年一〇月二八日に一乗院良昭に宛てて押妨排除を命令した奉書は、真の発給者を明示しない点や用途の点から見て、後年の「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」と差異がない。同年一二月二九日に発給された次の史料⑪は、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」であると明確に断定できる。

史料⑪「菊亭家記録」<sup>(82)</sup>

当職事、譲与行文（紀行文）之由、被聞食畢、宣下未到之間、且可令存知之由、被仰下之状（「仍執達」脱力）如件

〈万里小路大納言〉

応永元年十二月廿九日 判（万里小路嗣房）

紀伊国造殿（紀俊長Ⅱ紀行文父）

紀伊国一宮日前国懸神社の神職紀伊国造家に対する譲与安堵である。「宣下未到之間、且可令存知」という文言は長者宣にもみられ、官符が交付されるまで暫定的に業務を行うよう命じる文言である。奉書の真の発給者が太政官を支配していることを背景とする史料であると言つてよい。

「紀伊国造」紀俊長の生母は山科教行（室は紀伊国造仲光女）女で、<sup>(83)</sup>

山科教言の姉妹にあたる。『教言卿記』には俊長との交渉がしばしばみえ、同記応永一三年七月一六日条・同月二六日条・同年九月二四日条には俊長と広橋兼宣・裏松重光ら義満の側近公家衆たちとの交際記事がある。別に、子息行文への譲与について記す『行文讓補記』が伝わる。<sup>(84)</sup>

『行文讓補記』には応永二年某月一八日、「奉請取官府（官符）」、同月二一日に「参（義一將軍）御所、室町殿御事也（中略）、御前万里小路大納言（嗣房卿）祇候、年齢事御尋也、大納言（万里小路嗣房）被申御返事、丹生社事被申、不思議之由被仰」という記事がある。上洛して太政官符（實際は官宣旨か）を受領し、三日後に義満の室町御所に参上して万里小路嗣房の取り次ぎで義満に謁した、と記されている。厳密に言えば、応永元年一二月一七日に「將軍」は義満から義持に替わっている。<sup>(85)</sup>とはいえ、義持の実権行使を考慮する必要はない時期なので、記録者の誤認とみておいて問題ないと思われる。

史料⑪の予告した「宣下」を受領したあと紀行文が義満に御礼言上をしていること、その際に史料⑪の奉者である万里小路嗣房が紀行文と義満との取り次ぎにあたっていること、「宣下未到之間、且可令存知之由」という文言から太政官に対する支配を前提とする文書とみられることから、史料⑪は「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」と断定して問題ない。

史料⑩⑪は義満の出家以前に発行されたものだが、「義満の仰せ

を奉じる伝奏奉書」とみて良いと考えられる。よって、史料⑨が「家礼の奉書」ではなく「伝奏としての奉書」である蓋然性はやや強まるのではなからうか。「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」は義満の出家以前からあり、後円融上皇の死没を契機として発給が開始されたとみて良いと思われる。『大日本史料』の編者が史料⑩の位置づけに苦しんだように、これらは崇光上皇の院宣が発行されるようになるはずの局面で、それに代わる関係で発行されるようになったのである。よって、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」の役割は、崇光上皇が治天の君として院政をしくことを阻止する点にあったとみるべきではないかと考えられる。

当時、持明院統皇族のなかで政務を聴断する可能性があったのは、崇光上皇と後小松天皇だけである。崇徳上皇と後白河天皇とが対立した保元の乱の直前と同じ構図が出現したのである。崇光上皇が院政を開始したとすると、長講堂領の継承について光厳上皇が定めた譲状（置文）の規定が改変される可能性があった。当時まだ皇子をもたなかった後小松天皇の皇儲についても、崇光上皇が決定的な介入を行う可能性があった。「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」の出現は、たしかに義満による権限奪取の側面をもって、その敵対的な側面は崇光上皇に対して向けられていた、と考えるのが良いように思われる。

#### 【足利義満の政務決裁と長講堂領の没収】

義満と伝奏との関係についての従来の研究は、①公家寺社からの訴訟の取り次ぎに注目した伊藤喜良氏の研究<sup>(86)</sup> ②天台・真言僧に対する祈祷指令に注目した富田正弘氏の研究<sup>(87)</sup> を出発点としている。ただし、両氏の研究では足利氏の家産官僚としての公家衆や家司・家礼の立場で発給した文書が存在が意識されていなかった。<sup>(88)</sup>

①について云うと、伝奏は公家寺社からの提訴を、義満の家産官僚である「申次」公家衆を介して義満へ取り次ぐ。伝奏ではない家司、家礼が直接受理したり、裁決を下達する奉書を出す例もある。伊藤氏の視角は、公家衆の武家内部への浸透という点にあるため、伝奏と武家の家産官僚との区別が曖昧となる問題、義満が伝奏を介して朝廷政務を制御する側面への注意が弱くなる問題がある。②の祈祷の指令は、義満の家産官僚である「御祈奉行」が発令しており、伝奏が発令したとみるべきではない。朝廷政務機関としての伝奏と義満の家産官僚との弁別が正しくない。

伝奏特有の挙動として注目すべきものは、伊藤・小川・富田の各氏<sup>(89)</sup> が言及されている、奉行（弁・藏人）への指令書としての伝奏奉書である。特に富田氏の示された、伝奏奉書は担当奉行（弁・藏人）に『御教書』を発給させるための手続文書」という観点は極めて重要である。伝奏奉書が太政官（弁官）を支配する媒介物であるという点から、足利義満の朝廷支配という脈絡を読み取ることができるのである。

鎌倉期以来の伝奏の発達をみると、①後嵯峨院政期に設置された院の奏者としての伝奏、②文保元（一一三二）年に初出し、担当寺社の訴訟を専管する寺社伝奏（「神宮伝奏」「諸社・諸寺伝奏」）、③朝廷儀式に際して上卿・奉行（蔵人・弁官）からなる行事所を監督する行事伝奏がある。このうち、③の行事伝奏の支配は太政官の分枝（上卿・弁）に対する指揮権の掌握を意味する。朝廷支配という文脈で注意すべき事象と言える。

以下、長講堂領の没収前後の政務実態に即して、上記の問題を検討してゆく。

崇光上皇が没したのは応永五（一三九八）年正月一三日で、それから間もなく、長講堂領以下は崇光の皇子である伏見宮栄仁親王から没収されて後小松天皇に移管された。

史料⑫『椿葉記』<sup>(91)</sup>

いつしか御領の事ともさたありて、御百今日すくれは、やかて長講堂領・法金剛院領・熱田社領・播磨国衙以下、こと々々く禁裏（後小松天皇）へめされぬ。あまりになさけなき次第、申せはさらなり。しかれば忽に御牢籠のあひた、親王（栄仁親王）やかて御出家あり。おほよそ長講堂・法金剛院領の事は、光厳院御置文に、親王踐祚あらは直に御相続あるへし、もし然すは、禁裏（後光厳天皇）御管領あるへし、但末代両方御治天あらは、正統につきて伏見殿の御子孫御管領あるへ

きよしを申をかる。しかれとも親王（栄仁親王）登極の御先途を遂られねは、力なき次第なり。

崇光没後、「御百今日」を過ぎる頃に長講堂領以下は栄仁親王から没収されて後小松天皇に移された。栄仁親王は「御牢籠」によって出家に追い込まれた。この措置は崇光流皇統を政治的・経済的に破滅させたのである。とはいえ、栄仁の王子貞成親王は「親王登極の御先途を遂られねは、力なき次第なり」と記しており、この没収が貞治二年光厳上皇讓状に基づく合法的なものであることを認めている。義満の決裁と思しいが、この決定は、果たして幕府の裁定なのか、朝廷の裁定なのか、いずれなのであろうか。

同年五月、「入道宮」直仁が没し、その遺言により直仁一期分の室町院領七箇所と萩原殿御所が栄仁に与えられた。貞治二年光厳上皇讓状では、直仁一期分は「宗領」に返付する定めであった。『椿葉記』によれば、直仁は生前、自分の所領を崇光の子孫に譲る意思を示していたという。『椿葉記』には「此子細、准后（足利義満）きき披かれて、室町院領の中七箇所と萩原殿の御所とを伏見殿へ進せらる」と記されている。<sup>(92)</sup> 足利義満は直仁の遺志を尊重して、室町院領七箇所等を栄仁に与えることを認めたのである。

このように、決裁したのは足利義満だが、下達は勧修寺経豊が「右中弁」として奉じた同年一〇月一六日後小松天皇綸旨によつてなされた。<sup>(93)</sup> よって、義満は「きき披かれて」、後小松天皇の財産

になっていた室町院領七箇所等を榮仁に与えることにし、それを弁官經由で下達したのだと言える。これは、幕府首班として幕府機関を動かした決裁ではなく、後小松天皇に替わって弁官を指揮する形で行った朝廷の決裁と考えるのが合理的である。直仁遺領は、貞治二年光厳上皇讓狀に基づいて後小松天皇の保有に帰す定めになっていたという点で長講堂領と同等の位置にある。長講堂領の処分手続きも同じとみて良からう。

応永五年当時、足利義満は出家していた。室町院領等の移管命令を、義満が朝廷の命令として発令させえたということについては、この時期に独特の背景事情があった。

これより以前の応永二年六月、義満が出家した。この際に、後小松天皇は、出家後も内裏に参入して従前通り政務を取り仕切るという確約をさせて義満の出家を許可している。

関白一条経嗣の日記『荒暦』をみると、<sup>(94)</sup> 事象は応永二年四月二二日に後小松天皇が突如として室町殿に行幸し、義満の出家を慰留するという形で始まる。義満が正式に出家の意向を後小松に表明したのは同月二五日のことで、直ちに却下された。義満は六月一九日に再び出家の意向を後小松天皇に表明し、「凡政道以下事、如此間可申沙汰、参内以下每事不可相替之由、被申」<sup>(95)</sup> ため、許可を受けることができた。出家したのは翌二〇日のことである。

政務決裁の実態は、義満の手がついていた宮中の女房「今参局」に密通した疑いで同月二五日に日野西資国を解官した事件から窺

い知れる。『荒暦』<sup>(96)</sup> には「出家入道最初有罪科之沙汰条、豈可然哉、莫言々々」とあり、義満の意思による決定だったことがわかる。経嗣は資国の解官について、「万里小路大納言(嗣房)奉書」により藏人右中弁土御門資家が「宣下」したと記す。義満が伝奏奉書を用いて太政官を指揮したことがわかる。

出家の前年の一二月に発給された既述の史料⑩でも、「宣下未到之間、且可令存知」と命じており、義満が宣下を左右する立場にあったことが知られる。出家の前後にわたり、太政官を制御する義満のもとで伝奏万里小路嗣房が奉者として介在している。これが、出家以後も出家以前と「相替」わらず、「政道以下事」を「申沙汰」することの実態であったとみて良からう。応永五年の長講堂領没収命令の宣下に伝奏が関与していたのかどうかを直接的に示す史料は伝わらないが、如上の様相から推論すると、「義満の仰せを奉じる伝奏奉書」によって宣下が実行されたとみて問題がないのではなからうか。

義満の挙動は、出家によって世俗の規範から自由になった結果ではあるまい。後小松天皇の特別な委任によって、出家した後にはほんらい許されないはずの政務決裁を命じられた結果によるものと解釈すべきではないかと思われる。長講堂領を榮仁親王から没収したことも、直仁親王一期分を「きき披かれて」榮仁に与えたことも、後小松天皇から朝廷政務の全権を委任されていることによつて可能になった。これらに先立つ応永二年、後小松天皇が

積極的に義満の出家を慰留し、出家後も従前と同じという条件を

課して政務を委ねたことを考えると、この態勢は後小松天皇の意思の産物であり、崇光流との対立に決着をつける戦略的な意図のもとに、義満の力を發揮させるためにとられた態勢と思われる。

出家以後の義満の位置は、「治天の君」に相当するものだった。

周知の如く、応永三年九月、延暦寺大講堂供養に初めて法皇の威儀を以て臨んでからは、法皇の威儀を模した。政務決裁の実情ではより明確に「治天の君」に近い挙動が認められる。<sup>(97)</sup>

応永八（一四〇一）年二月二十九日、土御門内裏が炎上した。<sup>(98)</sup>

『吉田家日次記』同年三月五日条には、造内裏「伝奏」に定められた坊城俊任の活動が記録されている。

史料⑬『吉田家日次記』応永八年三月五日条<sup>(99)</sup>

（前略）及人定、自殿（関白一条経嗣）御筆御書到来、急有

可被仰事、今間可参者、則倒衣馳参、出御、仰云、造内裏条々事、伝奏（坊城大納言俊任卿）、今日伺申北山殿之处、職事満

親朝臣（中山満親）未練之上、除目（三月二十四日県召除目）

申沙汰計会、不可事行歟、可仰定頭（葉室定頭）旨、可申入

執柄由、被仰伝奏了、為御使可仰定頭者、急可罷向、但重事也、可被仰御書之由申入之、則被下御書（被宛遣父入道大納

言（葉室宗顕）、予（吉田兼敦）持向彼亭、則禅門（宗顕）

対面、委細談合、所詮云非器、云不階、不可叶云々、則被献

#### 請文（下略）

午後十時頃、吉田兼敦は急な呼び出しを受けて関白一条経嗣邸に赴いた。「伝奏」坊城俊任を介して義満の指令を受けたから、葉室邸に行けという使者の用命であった。経嗣の言によれば、「伝奏（坊城大納言俊任卿）」が造内裏奉行の人選などにつき義満に伺い申したという。義満は、蔵人頭中山満親は不相当と述べ、蔵人権右少弁（転じて左少弁）葉室定頭を適任として、俊任から関白一条経嗣に伝えよと命じた。これをうけて経嗣は兼敦を使者として定頭の父葉室宗顕に義満の指令を伝えた。兼敦は経嗣の御書を帯びて宗顕邸に行き、請文をとって復命した。翌三月六日、葉室宗顕が北山殿に赴き、義満に辞退を申し立てたが、説得されて領状する。<sup>(100)</sup>「伝奏」坊城俊任は造内裏に関わる諸行事を担当する行事伝奏とみて良い。義満は伝奏を用いて奉行の人事を発令しており、関白一条経嗣に対しても上位者として接している。これに相当する地位は「治天の君」しかない。もちろん、尊号宣下なしに行っており、権限行使の根拠は天皇の委任以外に想定できない。

義満の挙動は、「幕府による朝廷に対する支配」ではなく、後小松天皇から朝廷政務の指揮を委任されたことによる「公家としての朝廷支配」であったと評価される。後円融院政から義満の「院政」への移行という富田氏の理解にかなうことになるが、後小松天皇からの「委任」があり、「奪権」ではない。崇光上皇に「治天



の君」の地位を与えず、崇光流を排除するという点で、後小松天皇と義満との間に協調があったとみられるのである。

### 【足利義満と後光厳流との親族関係】

義満が「治天の君」のように振る舞うことは、朝廷に対して敵対的なものであったのだろうか。崇光流からみれば敵対的だが、後光厳流皇統からみると敵対的とは言えない。

崇光上皇の死没前後、義満は北山殿を造営していた。<sup>(101)</sup> 立柱上棟は長講堂領没収以前の応永四年四月一六日である。当時、北山には後小松の祖母崇賢門院仲子がいた。

『兼宣公記』応永三（一三九六）年十一月一日条に「北山殿（女院）が広橋邸を訪れる記事がある。義満が北山殿を造営する以前は、北山に居住していた崇賢門院が「北山殿」と呼ばれていたのである。仲子は後光厳の没後、日野宣子の北山邸に同居していたから、宣子の邸宅を伝領して女院御所「梅町殿」（梅松殿）としたらしい。<sup>(102)</sup>

義満は応永五年一月二日頃はまだ室町殿に居住していたことが確実で、<sup>(104)</sup> 同六年三月二〇日伊勢参宮から帰京して北山殿に帰り入った頃には居を移しているらしい。<sup>(105)</sup> 同年四月一四日大法華經法を北山殿で行ったことが裏付けとなる。<sup>(106)</sup> 義満を「北山殿」と呼称する所見はやや遅れる。応永七年二月一九日に「北山殿」で行われた七仏薬師法の記録の中で、広橋兼宣は義満を「室町殿」と<sup>(107)</sup>

記した。同年一〇月六日に女院御所梅町殿が炎上して、<sup>(108)</sup> 義満北山殿の郭内に再建された。このあと、『吉田家日次記』応永七年三月一日条に「月蝕御祈事、誰人哉之由、自北山殿（足利義満）被仰下」とある。これが義満を「北山殿」と呼んだ初見史料とみられる。

よって、崇光上皇の死没前後の時期は、義満が北山に居を移して後小松の祖母崇賢門院と一体化する時期にあたっていたことになる。北山殿は義満の「北御所」、室日野康子の「南御所」、崇賢門院の「女院御所」の三区画からなり、日常的に往来があった。<sup>(109)</sup>

応永八年六月、足利義満は北山殿で如法經供養を行い、二〇日の経供養・奉納の日には「両女院」（後小松の祖母崇賢門院・生母通陽門院三条厳子）も出座・聴聞した。<sup>(110)</sup>

史料⑭『門葉記』所収応永八年六月如法經供養表白文<sup>(11)</sup>

弟子南無帰命白仏言、蓋聞、難解難入之妙典者、道場所得之玄文也、（中略）然則三十番神交垂擁護之手、一十羅刹第（女力）回影向之眸、現保王母方朔之仙齡、当誇安養都率之快樂、捧此勝利、賁八幡三所之神靈、分茲善根、祝今上陛下（後小松天皇）之不祚、倍耀威光於本地垂迹之日、并復德化於聖代明時之風、乃至低頭举手之人、見仏聞法之輩、皆答五十展転之巨益、悉證三身具足之良因、敬白

応永八年六月 日

右の史料⑭はこの際に捧げられた表白文で、「今上陛下（後小松天皇）之丕祚」を言祝ぐ文言があるところから、供養が後小松天皇のために行われたことがわかる。よって、崇光流に対する態度とは異なつて、義満は後小松とその家族に親密であつたと言える。

広橋兼宣の父仲光は崇賢門院仲子の義弟にあたり、その女子「尊喜御房并素玉御房」は崇賢門院の女房、子息の兼宣は女院司であつた。このように、崇賢門院と広橋家とは親密だつた。義満の生母紀良子が崇賢門院の妹であることを直接に裏付ける確実な史料は乏しいが、仲子の義弟仲光が義満にとって傍系尊属であつたことはほぼ確実とみられる。

史料⑮『兼宣公記』応永九年正月一日条

（前略）抑年々自北山殿（足利義満）被進女院（崇賢門院仲子）土産、当年自北山殿被進禪閣（広橋仲光）、是自女院依被申之子細也（下略）

義満が例年年初に崇賢門院に進上していた「土産」を、女院の意向で本年から義満が仲光に「被進」れることになったとある。「進」せるという表現から、仲光が義満に対して尊属であることがわかる。類例として、『兼宣公記』応永八年一〇月二五日条に、仲光邸持仏堂に安置する阿弥陀三尊像を「自御室宮被進之」たという記事がある。「御室宮」永助法親王は崇賢門院所生であり、仲光は叔

父すなわち傍系尊属である。一般的には皇族である永助法親王が尊く仲光が卑しいけれど、親族関係から「進」せられたと記したらしい。義満が主人であり仲光は家礼である。義満が仲光に「進」せられたと記す兼宣の記述は、親族関係における尊卑を反映しているとみられる。これにより、義満の生母紀良子が崇賢門院広橋仲子の実姉妹、仲子が義満の伯母であるということが、間接的に裏付けられると考える。

当該期の義満を皇統分裂のなかに位置づけると、親族関係にある後光厳流ときわめて親しく、後光厳流と対立していた崇光流に敵対的であつたと言える。後小松天皇は義満を用いて長講堂領の伝領問題に決着をつけようと図り、出家後にも政務の全権を行使する状態を許した。義満は北山殿において後小松の祖母で義満の伯母にあたる崇賢門院と同居し、後小松天皇に対する庇護者として「治天の君」同然の挙動をとつたと言える。

観応の擾乱の際に、幕府と和議（正平一統）を結んだ後村上天皇は入京して即位式・大嘗会を実施する予定であつた。<sup>⑮</sup>和議が破れた結果、即位式・大嘗会は実施できなくなり、後村上天皇の登極儀礼は結局のところ完結できなくなった。いっぽう、持明院統側では、すべての上皇と正統な皇位継承者直仁皇太子が南朝に身柄を拘束され、正統な皇位継承が全く不可能な状態に陥つた。皇位継承抗争の結果として、天皇家のどの皇統も正統な皇位継承状態を実現できなくなる、深刻な政治的破産状態が現出したのであ

る。

この事態に直面して、がんらい皇位につくべき人ではなかった後光厳天皇を無理矢理に皇位につけるといふ解決法がとられた。他に可能な解決方法がなかったからだ、言うまでもなく正統性はなかった。父である光厳上皇は後光厳の登極を認めておらず、南朝側は後光厳天皇を「偽朝」<sup>(116)</sup>と呼んで否認した。広義門院は後光厳を中継ぎとして崇光流への橋渡しにすることで穏便に収拾しようとしたが、後光厳の女官広橋仲子が武家の後継者義満の従弟にあたる緒仁(後円融)を産み、この戦略も破綻に追い込まれた。

細川頼之・足利義満は後光厳流を護持する立場で問題进行处理する戦略を立てた。広義門院の調整策により皇位と家産の継承関係が分裂していたから、これを解決する必要があった。長講堂領の伝領問題を解決するためには現に保有している崇光上皇の影響下にある廷臣を制圧する必要があった。朝廷内部に政治的な齟齬があるところから、武家が公家社会の外部に位置を占めている状態では解決できない。そこで「足利義満の公家化」が必要になった。小番衆の制によって廷臣たちを後光厳流の天皇後小松に結びつけ、伝奏奉書を握って崇光上皇の院政を阻止した。その意味で、足利義満が治天の君として振る舞う様相は、細川頼之の執政期から一貫して続いてきた過程の最終局面にあたると思われる。義満の朝廷支配の強さは、守られる形になる後光厳流の正統性の欠如が極めて深刻であったことを、裏返し形で示しているであろう。

とはいえ、この関係は権力者個々人の家族関係に強く依存しており、世代が交代するとそのままの形では維持できなかった。足利義持は後小松天皇の再従兄弟であり、親族関係上は同じ世代に属する。このため、義持が後小松に対して治天の君として振る舞う挙動は避けられたと考えられる。近年の石原比呂氏の研究では、義持は後小松上皇・称光天皇に対する執事分・准摂関として朝廷儀式に臨んだとされている。義持が自ら立場を規制して下位に降り立ち、後小松が院政を行うことを支える姿勢をとったと解される。

義満時代の朝幕交渉は公武の首班である義満の自問自答であり、仲介者の存立余地はない。これは、義持時代に変化し、武家首班(足利義持)と朝廷首班(後小松上皇)との交渉という局面が発生し、仲介者となる伝奏に新たな性質を刻印したと考えられる。

### 第三章 「武家伝奏」の形成

#### 【「治天の君」後小松上皇と伝奏】

後小松天皇は応永一九年八月二九日に称光天皇に譲位し、九月一四日に義持を院執事、日野重光を執権として院庁を開いた。<sup>(118)</sup>重光は応永一三年二月一二日に没した広橋仲光<sup>(119)</sup>から南都伝奏・石清水伝奏を継承し、仲光の喪に服した兼宣に替わって義満の政所年預<sup>(120)</sup>別当も引き継いでいた。<sup>(121)</sup> 応永二〇年三月一六日に重光が没すると、<sup>(122)</sup>

人事異動が発生した。

人事権の所在が明瞭なのは院執権である。『教興卿記』同年五月一六日条に、「今日仙洞執権事、左衛門督殿（烏丸豊光）ニ被仰、凡再三雖有故障、下御所（足利義持）御計之間、有領狀歟、珍重々々」とある。後小松上皇が重光の実弟烏丸豊光に執権就任を命じたところ豊光は再三固辞した。このため、「下御所御計」、つまり義持の斡旋により、この日、領狀の運びとなった。一ヶ月後の同記同年六月一日条に「執権（左衛門督）」とあり、帰結が知られる。後小松の意思で発令され、義持はこれを補佐したのである。

伝奏について、まず、応永二〇年五月二〇日に「被仰伝奏」<sup>(123)</sup>れた甘露寺清長をみる。清長は後小松在位当時から側近で、清閑寺家俊と並んで頭弁<sup>(124)</sup>を務めていた。御幸始など院政発足時の諸行事では清長が「奉行院司」を務め、清長に故障ある場合、清閑寺家俊が務めた。<sup>(125)</sup>後小松の信任する側近とみられる。清長は応永二〇年二月一日参議・左大弁となり、五月一日に従三位に叙せられて公卿になった。<sup>(126)</sup>そこで、同月二〇日に伝奏に補せられたのである。称光天皇の即位式を翌年一二月に控えていたから、後小松が信任の篤い清長を伝奏に起用したのだらう。安田歩氏<sup>(128)</sup>によれば、清長は明くる応永二一年三月四日にかけて後小松上皇院宣の奉者として活動し、同年八月二八日に権中納言に昇進し、即位式をみることなく翌日二九日に没した。<sup>(129)</sup>

『公卿補任』によれば、応永二〇年六月二九日に松木宗量が伝奏

となり、七月二三日には清閑寺家俊の父家房にも伝奏が仰せつけられたという。松木宗量・清閑寺家房については所見が乏しいが、後小松の側近であつたらしい。安田歩氏<sup>(130)</sup>によれば、同年九月頃から公卿である甘露寺兼長（清長父）や広橋兼宣の奉じる後小松上皇院宣が出現する。院宣の奉者を務める公卿は伝奏であつた可能性がある。広橋兼宣の場合、日野重光の没後、重光から南都伝奏・石清水伝奏の役目を引き継いでいる。<sup>(132)</sup>清閑寺家俊も、応永二一年三月一六日に参議・左大弁、続く一〇月二〇日に従三位となる前後から院宣の奉者として現れる。登極儀礼に対応するため伝奏が増員されたのかもしれない。<sup>(133)</sup>

複数の伝奏が存在し、甘露寺清長・清閑寺家俊・松木宗量は、親密さの点からみて、後小松の意向で伝奏に補されたように思われる。ただし、義持と後小松との仲介業務は広橋兼宣に集中して認められる。兼宣に「武家伝奏」などの呼称をあてた確実な史料はないが、端緒にあたる実態が認められる。

義持は伝奏の任免権を後小松上皇に委ねたが、伝奏奉書を自分の意思を通達する文書として運用している場合が少なからずあり、伝奏が朝幕に両属するような姿になった。

史料①⑥ i 「壬生家文書」<sup>(134)</sup>

若狭国々富庄事、前官務（壬生周枝）歎申旨候之間、如元被返付之由、被仰下候、可被得其意候也、謹言

応永廿一

広橋大納言

十月十九日

兼宣

三方殿（若狭守護代）

史料⑬—ii「壬生家文書」<sup>(135)</sup>

「奉書案」（端裏書）

若狭国々富庄并美作国久世保事、伺申候処、御知行不可有相違之由、被仰出候、仍伝 奏奉書両通執進候、恐々謹言

応永廿一

清少納言入道

十月十九日

常宗（清原良賢）

（宛所を欠く）

史料⑬—iii『建内記』嘉吉元年七月記紙背文書

大嘗会大奉幣米、諸国散在之御門跡領等免除事、任永和 勅裁可止催促之由、被仰伯二位（神祇伯白川業定）候畢、可有御存知之院御気色所候也、以此旨可令申入一品宮（仁和寺門跡永助法親王）給、仍執達（裁断により「如件」欠失）

応永廿二年

三月十五日

権大納言兼宣奉

謹上 菩提院僧正（守融）御房

史料⑬—iは応永二十一年一〇月一九日に若狭国富莊を壬生周枝

に返付する決定が下されたことを若狭守護代に通達する広橋兼宣奉伝奏奉書である。同日付の史料⑬—iiは史料⑬—iの送り状であり、史料⑬—iの発給の取り次ぎを務めた清原良賢入道常宗が史料⑬—iを「伝 奏奉書」と呼んでいる。『看聞日記』をみると、清原良賢は応永二十三年以前から同二十八年正月にかけて伏見宮家から義持に通交する際に取り次ぎ役を務めており、<sup>(136)</sup>義持の側近であったことが知られる。守護代宛であることも勘案すると、兼宣の奉じる史料⑬—iは「足利義持の仰せを奉じる伝奏奉書」だったとみて良い。史料⑬—iiiはほぼ同じ時期に兼宣が奉じた後小松上皇の院宣である。「院御気色」文言を含むから、後小松上皇の仰せを奉じていることが明らかである。内容は「大嘗会大奉幣米の免除であり、称光天皇の登極儀礼に関わって伝奏の増強が行われたという可能性と関わるものだと考えられる」<sup>(137)</sup>。

ただし、真の発給者を示さない奉書が全て義持の仰せを下達している訳ではない。『薩戒記』応永二十七年四月二二日条には、蔵人頭中山定親に口宣の発給を命じる、真の発給者を示さない万里小路時房奉書があり、定親は「奉院宣、示送」と記している。同記応永三三年八月二二日条には、やはり時房が「奉仰」って蔵人頭園基世に口宣の発給を命じたという記事があり、基世が「任伝奏之消息之旨宣下」したとある。時房は伝奏として後小松の仰せを奉じて蔵人を指揮したのだが、院宣文言を含まない奉書でこれを行っている。

史料①⑥―iと史料①⑥―iiiとを見比べると、伝奏である広橋兼宣が、時により義持の命を奉じ、時により後小松の命を奉じる、幕に両属する立場にあつたことがわかる。兼宣は何れの場合にも「伝奏」として活動したとみられ、この態勢の中から、朝廷と幕府との連絡・調整にあたる「公武間申次」という業務区分が発生していったと考えられる。

『康富記』には兼宣が義持から後小松上皇周辺との調整を命じられる記事がある。

史料①⑦『康富記』応永二五（一四一八）年八月一三日条

（前略）室町殿被仰広橋云、仙洞当時御成敗之事、不被明理非、妄被成院宣之条、不可然也、御成敗事、雖一事不被礼明理非、加様只以口入被成院宣之間、不及留申、所詮自仙洞院宣可書下之由、被仰付者、蒙仰人々可尋室町殿申、誰人モ被仰付、下ニテハ不能申上之間、非據之御成敗ナラバ予可支申、無子細ナラ者、自元不能左右、此旨為伝奏可觸遣人々之由、被仰付広橋云々

中原康富が清原良賢から聞いた話である。義持は後小松上皇の裁決に不適切なものが多く指摘し、今後は院宣の発給を命じられた者はすべていったん義持に通知して判断を仰げということを、「伝奏」として人々に触れ遣わすように兼宣に命じた、という。

応永二〇年代には武家の裁許原則についての見直しが行われており、応永二九年に法制化される<sup>(138)</sup>。院宣による裁許が幕府と関係なく行われることは、幕府法務に影響を及ぼす。安田歩氏は史料①⑦から、後小松の院宣発給に義持が神経を使っていることに注目され、院宣が独自に発行され得たこと、その影響力が小さくなつたこと、このために義持と後小松との間で調整が図られることを指摘されている。史料①⑥―iの「足利義持の仰せを奉じる伝奏奉書」と史料①⑥―iiiの後小松上皇院宣とが、同じ伝奏広橋兼宣によつて奉じられている事実と、兼宣が義持の意向を後小松の命令発給担当者たちに伝達した史料①⑦とを勘案すると、伝奏の仲介役としての機能が窺われる。<sup>(140)</sup>

広橋兼宣は後小松の伝奏であると同時に、『兼宣公記』の記述から義持の家司の筆頭者でもあつたことが知られる。<sup>(141)</sup> 伝奏が足利家家政機関の長を兼ねる状況は、日野重光と義持期の広橋兼宣に特有の現象であつた。他の伝奏と異なる点である。朝幕の調整役として適任だつたとも言えるが、義持と後小松との間で利害・意向が対立する場合には、板挟みになる立場でもあつた。

『看聞日記』応永二十七年九月十四日条によると、兼宣は義持の不興を買つて「室町殿昼夜祇候人々」から除かれ、「禁裏・仙洞可祇候」と命じられたとある。十一月一日条には義持の「御気色以外不快」のため、「禁裏・仙洞御使不勤仕籠居」の状態にあつたと記されている。要するに、義持の不興を買つて室町殿への出入

りを差し止められ、「禁裏・仙洞御使」を務められなくなったのである。この時期、武家に参仕していた公家衆の多くが勘気を被っており、義持の「御祈奉行」の地位にあった勸修寺経興だけが「七仏薬師法奉行之間、一人祗候」という状態だった。結局、一二月四日条に「別当経興朝臣被補伝奏」と見え、伝奏が更迭された。後小松が兼宣に替えて経興を起用した理由は、「禁裏・仙洞御使」を務めることができるかどうかが大切な問題だったからだと思われる。<sup>(142)</sup> 武家の家産官僚であることが要件であった。

このように朝幕の意思疎通の仲立ちとして伝奏が重要になってきたところに成立したのが、足利義教時代の「公武間申次」、これを担う特定の伝奏であったと推測される。

#### 【「公武間申次」の出現と展開】

足利義教は兄義持の執政期には青蓮院門跡の地位にあり、幕府内部の人脈とも朝幕交渉とも隔離した環境にいた。足利家督になった義教を朝幕の交渉関係の中に定位させるため、幕府側の提案で設置されたのが「公武間申次」とみられる。他方で、義教の継嗣から間もなく称光天皇が没し、崇光流の血を受けた後花園天皇が登極したため、二つの皇統の対立が再び首をもたげる。後小松上皇が没すると、「治天の君の欠如」という影が落ちた。

応永三五（正長元・一四二八）年正月、足利義持が急死し青蓮院義円が嗣立した。『建内記』の同年二月二三日条とみられる記事

に、幕府側（管領畠山満家か）の意向として、「以三人」て朝幕の間で「可 奏事、又可被仰下事」の取り次ぎを行わせる案が提示された。後小松上皇が認可し、称光天皇にも報告された。この「三人」とは、少しあとに「公武間申次」として現れる勸修寺経興・広橋宣光・万里小路時房と思われる。

二月二五日に称光天皇は時房一人を呼び出し、医師寿阿弥の扶持・戒坊の訴訟について武家への使者を命じた。時房は事情が分らないとして辞退し、<sup>(143)</sup> 替わって呼び出された広橋宣光は無理強いされて使者として武家に赴かされたが要領を得ず、結局、勸修寺経興が義教に取り次いだ。<sup>(144)</sup> 称光天皇は「公武間申次」に予定された「三人」を試してみたらしい。時房は、称光から使者を命じられたときに、三条公保から、義持時代には広橋兼宣・勸修寺経興が「申次」いでいた件だと聞いた。<sup>(145)</sup> この「公武間申次」は、義持時代に幕府への「禁裏・仙洞御使」を務めた兼宣・経興の活動の延長線上に位置づけられる。

三月某日、時房は後小松のもとへ参上し「今度申次、被加時房間事、尤可然之趣有 勅定」<sup>(146)</sup> という仰せを伝えられ、「公武間申次」三人体制が始動した。もともと、『建内記』の三月頃の記事には「申次三人」と記され、「伝奏」の呼称はみられない。『薩戒記』同年四月二一日条には「万里小路大納言（時房、改元伝奏）」から中山定親に改元定参仕を命じる奉書が到来したことがみえる。後小松上皇が「申次」に加える以前、既に時房は伝奏の一員になっていた

たと思しい。『公武間申次』を務める伝奏」という概念が新しいものだったため、単純に「伝奏」と呼称することを避けたのであろうと思われる。

七月になって称光天皇が危篤に陥った。『満濟准后日記』七月一日条によれば、義教は「内裏様御惱事并新帝御事等、以時房卿・経成卿・親光朝臣三人、可申談執柄」と命じた。<sup>(147)</sup>「三人」が協議するグループ的な活動様相は、経興の失脚前後まで続いた。

称光天皇が没して後花園天皇が踐祚する機会に、新たな分属が設定された。

『満濟准后日記』同年七月一八日条に「新主方伝奏事時房卿由、為仙洞被仰出云々、職事忠長（甘露寺忠長）云々」とある。後花園天皇の踐祚と同時に、時房は天皇担当の「新主方伝奏」になった。この記事から、伝奏の補任権が後小松上皇にあることがわかる。現存する『建内記』にはこの日の記事がないが、七月一九日・二〇日<sup>(148)</sup>に各方面へ発給された踐祚の準備に関わる時房奉書が伝わる。『満濟准后日記』正長二年二月一七日条には後花園天皇の読書始を時房が奉行したとの記事もある。時房の「新主方伝奏」とは、後花園天皇の要務を司る、秘書ないし補佐官に相当する役職なのであろう。これよりも以前、『薩戒記』応永三二年八月一日条によれば、同年に称光が危篤に陥った際に後小松は時房に「新帝事」を「申沙汰」させる内意であったとみえる。この頃、既に彦仁王（後花園）が皇儲候補として注目を集めていた。後小松上皇

には自分の側近である時房を後花園の監督のために起用する構想が以前からあったのだろうと考えられる。

いっぽう、「公武間申次」「三人」の残る二人、勸修寺経興・広橋宣光の後小松上皇付き「伝奏」に配属されたとみられる。永享三（一四三一）年三月二四日に後小松上皇が出家した際、後小松と共に出家することを望む者の許可に関わって「両伝奏」が義教への取り次ぎにあたった記事がある。この「両伝奏」は広橋宣光・勸修寺経成（経興）であった。後小松付き「両伝奏」の任務は、「新主方伝奏」時房と相似形とみて良からう。

「公武間申次」は幕府側から提案された業務を指す普通語で、後小松と後花園への分属を経て、「公武間申次」が公家側の伝奏の体制と本格的に結びついたと解される。

<sup>(149)</sup>万里小路時房は嗣房の子だが、応永五年に父が没した時には五歳であった。義持の死没を記す『建内記』応永三五（正長元）年正月一八日条に、「予自雲客之時加彼（足利義持）家司」とある。義持の家司であつたらしい。既述の通り、応永二七年から同三三年ごろ、後小松の「院宣」を藏人に伝達して口宣を発行させる伝奏奉書を奉じている。後小松の側近でもあつたようだ。後小松が「新主方伝奏」に起用した背景には、崇光流の血をひく後花園天皇に対する統制という問題があつたのだろう。義教嗣立とともに「公武間申次」三人に加えられ、後花園天皇の「新主方伝奏」となり、正長二年二月二五日に「南都伝奏」を兼ねた。<sup>(150)</sup>永享五年一〇



月九日、義教の忌憚に触れて「奈良伝奏（南都伝奏）」を兼郷に更送され、<sup>(151)</sup>「公武間申次」の実を失う。義教晩年に後花園の命で賀茂祭伝奏に起用され、<sup>(152)</sup>嘉吉の乱後に南都伝奏に復した。<sup>(153)</sup>

勸修寺経興は光厳上皇の側近だった経頭の曾孫で、後円融上皇の院執権経重の孫にあたる。<sup>(154)</sup> 応永七年正月五日、義満の御給により五歳で叙爵し、<sup>(155)</sup> 応永一四年頃から北山殿大法祈禱の布施取を勤めた。<sup>(156)</sup> 義満の家司とみられる。既に触れたとおり、義持の「御祈奉行」を務め、<sup>(157)</sup> 応永二十七年末、一時的に逼塞した広橋兼宣に代わって「伝奏」となり、<sup>(158)</sup> 朝幕間の取り次ぎにあたった。義教継嗣直後、「公武間申次」三人に加えられ、<sup>(159)</sup> 正長元年六月二五日に義教の道号が道興に定められた際に「経成」に改名し、<sup>(160)</sup> 後小松付き「両伝奏」の一人となった。正長二（永享元）年二月二五日に賀茂社伝奏を兼ね、<sup>(161)</sup> 永享三年以前から石清水八幡宮伝奏も兼ねていた。永享三年三月に義教の機嫌を損ねて立場が悪くなり、翌永享四年七月一八日には所領を奪われて籠居し、<sup>(162)</sup> 「公武間申次」の実を失った。その状態のまま永享九年三月二四日に病没した。<sup>(163)</sup>

広橋宣光は兼宣の嗣子である。『満濟准后日記』応永二四年二月一日条にみえる足利義量元服儀に、「五位役」を務めた記事がある。その後、父兼宣のもとで足利將軍家家司として活動した。義持時代に伝奏となった徴証はなく、義教嗣立とともに「公武間申次」三人に加えられ、<sup>(164)</sup> 応永三五（正長元）年三月、義宣（義教初名）の諱を避けて「親光」に改名した。<sup>(165)</sup> 次いで後小松付き「両伝

奏」に配属された。永享三年五月に義教の道号「光山」選定の際に、「光」字を避けて「兼郷」に改名した。<sup>(166)</sup> 永享四年六月一日に後小松の院執権日野秀光が没して日野嫡流家が断絶した。<sup>(167)</sup> 同年一月九日、兼郷は義教の命で秀光の遺跡を継承し、「日野兼郷」と号して後小松の院執権となる。<sup>(168)</sup> 永享五年一月一日、後小松死没の直前に時房に替わって「南都伝奏」となった。<sup>(169)</sup> ここで「公武間申次」三人のうち経成・時房が失脚したことになり、兼郷が単独で後花園と義教との間で「公武間申次」を務めてゆく。永享八年一〇月に義教の忌憚に触れて籠居する。<sup>(170)</sup> 義教横死後、嘉吉元年一〇月に政界に復帰し、<sup>(171)</sup> 日野裏松勝光が元服して日野家督となったため、<sup>(172)</sup> 広橋に復姓した。

後小松上皇の生前には義教が後小松に「申沙汰」して伝奏の異動を決定した。『満濟准后日記』正長二年二月九日条に「南都伝奏事、可為万里小路大納言之由、今日被仰之間、且申遣彼卿了」とあり、満濟が義教の意向を伝える形で時房に南都伝奏就任への打診をしたことがわかる。同記同月二五日条には、足利義教が、時房を「南都伝奏」に、勸修寺経成を「賀茂社伝奏」に補す、という提案を後小松付き伝奏の広橋親光（宣光・兼郷）を介して後小松に申し入れ、「目出被思食候、早々可被仰付」との認可を得たとある。義教が起案して候補者に就任を打診し、後小松の許可を得て発令されたといえる。

罷免についても、義教が任免権そのものを握っているわけでは

ないようにみられる。

勸修寺経成（経興）の失脚は、永享三年三月に後小松上皇の出家に随って出家することを望む者の取り次ぎについて、義教から不備を追及されたのが発端である。<sup>170</sup> 義教が後小松に対して出家を諫止したにもかかわらず、後小松が押して出家したことに對する八つ当たりの処置であつたという。同年四月二十九日、石清水臨時祭の「伝奏」を務めるため出仕を許され、<sup>171</sup> 同年一〇月三〇日には義教男子誕生祈願のため粉川観音に奉納する帳の上書を世尊寺行豊に発令するにあたり、「伝奏（広橋中納言）」として命を伝えた。<sup>172</sup> ただし、義教の不興は解けず、翌永享四年七月一八日に、以前から勸修寺家と二条家との係争地になっていた勸修寺家領加賀国井家莊領家職半分を二条持基に与える旨の沙汰がなされて、<sup>173</sup> 没落が決定となつた。『看聞日記』永享九年三月二六日条の死没記事に、「此七ヶ年之間、公方御意不快、所領少々被召放蟄居、禁裏公事・番等ハ雖令出仕、室町殿事ハ一向籠居、散々式也、遂不蒙御免逝去」とある。朝廷の儀式や禁裏小番には出仕しているものの、武家邸への出仕が不可能になっていたらしい。従者として地位を失つたために「公武間申次」の実を失つたとみられる。

時房の南都伝奏罷免について、『看聞日記』永享五年一〇月一三日条には「万里小路大納言、此間室町殿違御意、奈良伝奏被召放、日野中納言（日野兼郷）伝奏被補」とある。その理由について、「室町殿出仕被止、禁仙ハ可参云々、此間違例之由申て、室町殿へ不

参、仙洞へハ御参之間被咎云々」と記されている。この直前の『満濟准后日記』同月六日条に「万里小路大納言来、自室町殿歳末年始計可参申入旨被仰出、計会無極云々」とあることと合致する。義教との関係が悪化して武家邸に出入りしにくくなり、そのために南都伝奏を罷免されたと言えよう。ただし、同年一〇月の後小松の葬送に際して、『看聞日記』同年一〇月二二日条には「伝奏万里小路大納言」と記されている。院の奏者としての伝奏職を罷免されたわけではなさそうである。兼宣や経成（経興）と同じく、伝奏ではあつたけれど、義教の機嫌を損じて「禁裏・仙洞御使」を務められなくなり、「公武間申次」の実を失つたとみられる。

永享八年一〇月一五日、「公武間申次」三人の最後の一人日野兼郷（広橋兼郷）が失脚し、替わつて、中山定親が「御祈伝奏」、ついで「禁中」伝奏に補された。

『看聞日記』同日条に「抑日野中納言（兼郷）、公方有御突鼻、失面目云々、在方卿御撫物事云々、但条々不義、以次被仰云々、御祈伝奏被改、今日中山宰相中将（定親）ニ被仰付云々」とある。兼郷は賀茂在方が義教のための祈禱に供する形代の出納という業務に関連して不調を咎められ、ついでに様々の難癖をつけられて「御祈伝奏」を罷免された。この日中山定親が補任されたこの「御祈伝奏」という役職名称は他に見られない。以前の家司の部署「御祈奉行」にあたるとみられる。

二日後の『看聞日記』同月一七日条に「中山（定親）（禁中）伝

奏被補、日野(兼郷)如申次可申沙汰之由、被仰云々」とある。「御祈伝奏」とは別に「禁中」伝奏」の改補が行われた。貞成親王は近臣の庭田重有を使者として定親に祝意を伝え、「内裏御料所」は正親町三条実雅・鳥丸資任らが奉行するよう「被仰」れた、兼郷の所領は全て没収されて出仕停止とされた、ということを知った。義教の意思による「御祈伝奏」の改補に従属する形で非常に厳しい処分が行われているので、義教の命による「禁中」伝奏」の改補とみて良からう。ただし、更迭日が異なることから、「御祈伝奏」と「禁中」伝奏」とは別の役職であることが分かる。「禁中」の「伝奏」であり、「内裏御料所」にも関わることから、形式的にせよ後花園天皇の認可を要したのではなからうか。

定親は「禁中」伝奏」について、「日野如申次可申沙汰」と命じられている。この「禁中」伝奏」は万里小路時房が務めていた「新主方伝奏」を時房が失脚した後に兼郷が引き継いでいたものだと考えて良いかと思われる。「禁中」伝奏」兼郷は内裏御料所の管理も担当していた。その任務は天皇の秘書ないし補佐官とみて良いだろう。

既述の通り、時房を「新主方伝奏」に補任したのは後小松上皇であった。「禁中」伝奏」や「内裏御料所共」の異動を命じたのが足利義教で良いとすれば、このとき、義教はかつての後小松上皇の「治天の君」の地位を実質的に占めていたということになる。このあとの中山定親の伝奏としての活動について、富田正弘氏

は次の史料から、伝奏は「公家支配機構に『院政』を行う手段」であり、義教は「みずからを上皇に擬することによって、公武の機構をみずからの支配下に収めた」、「国家的な祈祷主宰権は」<sup>174</sup>「室町殿の手に確保され、その頂点は実に義教の時代であった」と指摘されている。

史料⑱『建内記』永享一一(一四三九)年二月二八日条

彗星出現事、司天(従三位安倍有重卿)注進 室町殿、仍公家・武家御祈事、早可有其沙汰之由、被仰中山宰相中将(定親卿)・室町殿御祈事、諸寺・諸社・護持僧(十人)祈念事、為中山奉行相觸之、明後日(口日)、天地災変(御祭)御祈有重卿、可(勤行)注進之由被仰之、御修法両壇来月可被行云々公家御祈事、藏人右少弁俊秀、依御祈奉行、可申沙汰之由、被仰之、応安元年・永徳・至徳等度御祈条々、有尋沙汰、今度可被行条々、中山注一帯給藏人右少弁、是於室町殿申定分歟云々

彗星出現の報告を受けて、義教が中山定親に対して「公家・武家御祈」を行うように命じた。「室町殿御祈」については定親の奉書で発令し、「公家御祈」については定親の指示で公家の「御祈奉行」藏人右少弁坊城俊秀が繪旨を発行することが決まったという。既に指摘したとおり、中山定親は「御祈伝奏」と「禁中」伝奏」

の両職を帯びていた。史料⑮にみえる定親の業務は、この両職のいずれに関わるものであろうか。

「御祈伝奏」という職は永享八年一〇月に初めて確認できる職で、それ以前は足利氏の家産官僚制における「御祈奉行」、家司・家礼の部署名であった。既に触れたとおり、勧修寺経興は応永二十七年一二月四日に「伝奏」に補任される以前から足利義持の三条坊門邸で「七仏薬師法奉行」を務めていた。義持の家産官僚としての「御祈奉行」である。

義教初期の「公武間申次」三人はすべて足利將軍家の家司を歴任した家礼であったから、義教のために祈禱を奉行している。『満濟准后日記』応永三五（正長元）年三月六日条をみると、「公武間申次」三人は同道して義教と対面し、三条坊門御所の大法祈禱を勧修寺経興が奉行し、諸寺諸社祈禱の奉行は時房が辞退したため宣光が担当した。『満濟准后日記』正長二年五月一三日条には、御所大法祈禱の「御祈奉行」を時房に命じる記事もある。「公武間申次」伝奏三人はすべて武家の「御祈奉行」を務めていたと言える。

『満濟准后日記』正長元年七月二〇日条には、後小松上皇が「伝奏」勧修寺経興に対して、危篤に陥った称光天皇のため仏事を奉行するよう命じたが、武家「御祈奉行」を務めているという理由で拒否されたとある。武家「御祈奉行」は「伝奏」とは別物である。

これを踏まえてみると、「御祈伝奏」とは「伝奏」と「御祈奉行」

とが制度的に混交している事態の表れとも考えられる。もっとも、「御祈伝奏」の呼称は稀なので、単に記録した貞成親王が混同している呼称のうえでの混交なのかも知れない。史料⑮に即してみると、定親の奉書で「室町殿御祈」を発令する部分が「御祈伝奏（奉行）」の管轄と思われる。

中山定親は「禁中」伝奏」を務めており、後花園天皇への奏宣を掌握していた。史料⑮に照らすと、公家の「御祈奉行」蔵人右少弁坊城俊秀に指示して綸旨を発行させる局面が「禁中」伝奏」の業務と考えられる。史料⑮をみる限り、義教は天皇に通牒することなく綸旨発給を命じていると思われる。既に触れたように、応永二年、義満は伝奏万里小路嗣房の奉書を用いて職事土御門資家に指令し、日野西資国の解官を宣下させている。この意味で、義教には義満に通じる点がある。富田氏の御指摘のうち、伝奏を介して「公家支配機構に『院政』を行」ったという点に繋がる問題となる。

既に述べたように、後小松上皇の存命中は、例えば伝奏の補任権は後小松に帰属しており、義教は「申沙汰」する形で関与していた。よって、義教が後花園に対して「治天の君」のように振るうようになった契機は後小松の死没だろうと推察される。そこで、後小松上皇没後の持明院統朝廷の「治天の君」ということを考えてみると、この時期は、持明院統朝廷に「治天の君」が存在しなかった時期である、ということに思い至るのである。

## 【持明院統の分裂の終結】

義教期に「治天の君」が存在しなくなった原因は、二つの皇統の対立にあった。

晩年の後小松上皇は皇統認識に神経質になっていた。称光天皇に男子がなく、次子の小川宮が早世し、後光厳流の断絶が現実問題になっていたからである。この経緯については、横井清氏の『看聞御記―「王者」と「衆庶」のはざまにて―』に詳しい。<sup>(175)</sup>

後小松上皇は永享五年一〇月二〇日、次のような「遺詔」を残して没した。①貞成親王への「太上天皇」号宣下は後光厳流の断絶を意味するから許さないこと、②後花園天皇は後小松上皇の子（猶子）であるから、後小松の没後「諒闇」とすべきこと、③後小松上皇の仙洞御所は上皇の没後、貞成の御所にしてはならないこと、④自らの諡号は「（後）小松院」とすべきこと、以上である。<sup>(176)</sup>特に、①②③は後花園天皇の実父貞成親王がかつての後高倉院のように院政をしくことを警戒して定めた条項と思われる。

これを遵守するか否かは、②の点、後小松没後の「諒闇」実施に関わって直ちに問題化した。義教には「諒闇」とせず後花園を崇光流として継統する内意があった。義教は関白二条持基・前摂政一条兼良に意見を徴した。『満濟准后日記』永享五年一〇月二三日条には、義教の意向について「後光厳院御一流、可為万歳継帝者、此御子孫不慮儀不可出来処、既依無王子、伏見殿宮（当今御事）為御猶子被継帝位了」とある。つまり、子孫が断絶したこと

自体に後光厳流を王者として認めない神意が表れている、いまさら後小松の遺詔に随う必要はないのではないかというのである。持基・兼良は、崇光流として在位するとしても問題はないから、籤で決しては如何かと答申した。神祇官が籤をとり「旧院御一流分治定」となったため、義教も詮索をやめて諒闇実施でまとまる、という経緯をたどった。<sup>(177)</sup>二条持基・一条兼良が籤引きを提案したのは、義教自身が籤引きによって足利家督を継承していたからだろう。この決着により「治天の君」の欠如が体制化した。

三宝院満濟は、義教を説得する材料として、崇光上皇が吉野に囚われている際に「長御子孫可被断王位御望」という「御告文」を書いたと伝えた。<sup>(178)</sup>『看聞日記』永享五年一二月二三日条には、後龜山上皇がこの「御告文」を義満に渡し、義満が後小松天皇に進呈したとある。持明院統の内部対立が大覚寺統側の駆け引きに利用されたのである。

『後光厳天皇日記』をみると、告文を書いたのは崇光だけではなく、光厳上皇も告文を捧げていたことが分かる。しかもその提出先は春日社であった。同記応安三年一二月三日条に、崇光上皇が幕府に示した折紙のなかに、「故光厳院於南方被籠春日社」れた「御告文事」は「無其儀」きことだという記述があったと記されている。頼之が武者小路教光から取り上げて後光厳に進上した折紙の第一箇条である。後光厳は「凡可依御告文者、院（崇光）も朕（後光厳）も不可立歟」と論評した。つまり、光厳上皇が春日社に「御

告文」を籠めたことは隠しおおせない事実である。しかし、それを認めると光厳の子である自分も崇光（の子孫）も皇位につくことができなくなる。「只可依之之由、被仰之条可然」、つまり、告文には拘束されないと主張すべきだと記している。

ここで史料①を思い起こすと、光厳が直仁を正嫡に定めた理由は春日神の託宣であった。光厳が春日社に子孫の継帝を断念する告文を奉ったのだとすれば、それは直仁を正嫡に定めよと告げた春日神の神託への回答であったと理解できる。光厳と春日神との約束には崇光・後光厳のいずれも皇位継承候補としては含まれてはいなかった。南方に囚われて直仁の登極が不可能であることを悟ったとき、また、京都の廷臣たちが己の意思に反して後光厳を位につけたことを知ったとき、絶望した光厳が全ての子孫の皇位継承を否認することは神慮への誠実という点で、ごく自然なことかと思われる。史料①に明らかのように、崇光はもともと父光厳から皇位継承を断念するように命じられていた。光厳から「長御子孫可被断王位御望」という告文を書けと命じられれば、拒否することはできなかったであろう。

このようにみると、崇光上皇の告文を取り上げた三宝院満濟は、後亀山上皇の交渉術に振り回されているとも、利用しているとも思われる。後亀山が崇光の告文を提供して光厳の告文を出さなかった理由は、持明院統を全面否定しては両統迭立合意が成立しないと考えたからであろう。持明院統の内部分裂につけいって、両統

迭立合意の実現を期待したとみて良い。後光厳流が断絶に直面していた応永後期、崇光流でも栄仁の嗣子治仁王に男子がいらないという断絶の危機が表面化していた。<sup>(18)</sup>ここで、入道を予定されて果たせないまま養家今出川家に養われていた貞成親王がいなかったならば、持明院統自体の断絶と大覚寺統の復辟がありうる状況になっていた。南北朝合一が実現した当時は現実性がなかったかもしれないが、後亀山の駆け引きに合理性がなかったと断じることではない。翻って、義満が伏見宮家を完全な断絶に追い込まなかった理由を考えれば、虎視眈々と復辟の機会を窺っている大覚寺統への対策という側面があったとも考えられよう。

いっぽう、後花園の実父貞成親王の側では「治天の君」への意欲が動いていた。貞成は永享三年八月四日に石清水八幡宮に神馬を奉納し自らへの「太上天皇」号宣下を立願したという。<sup>(18)</sup>翌年一〇月八日、貞成は後花園天皇のために崇光流の歴史を説く『正統廃興記』〔椿葉記〕を著した。<sup>(182)</sup>「正統廃興」という書名は、「正統」である崇光の皇統が「廃」されてきた歴史が転換し、後花園天皇によって「興」される、という意味である。貞成は同月一二日に後小松の「両伝奏」のひとり勸修寺経成に対して、「仙洞（後小松上皇）叡聞露達不可然」という配慮から、冷泉高倉永基と協議して「密奏」する策を講じさせた。<sup>(183)</sup>しかしながら、後小松に忠実な万里小路時房が「新主方伝奏」として後花園の身边にあり、この時には果たせなかった。

後小松死没の翌年、後花園天皇に『椿葉記』（もとの『正統廃興記』）が伝達され、九月一日天皇から「委細記録殊以悦思食之由」を記す礼状があった。<sup>(184)</sup> 経成は義教の信任を失っていたが宮中には出仕しており、時房は「新主方伝奏」から斥けられていた。村田正志氏によれば、『椿葉記』は永享四年から六年にかけて、最低三回は改訂が行われたといひ、<sup>(185)</sup> 後小松の「諒闇」を意識して改定が行われた可能性もある。

後小松の遺詔の条項③、後小松上皇の仙洞御所を貞成の御所にしてはならない、という点については骨抜きにされた。永享七年八月から義教が後小松上皇の御所を取り壊して隣接地に貞成の御所を建て始め、一二月一九日に貞成がこれに移った。翌年二月九日、義教が後小松上皇御所跡地を貞成に進上し、伏見御所に残っていた近臣たちが転居して居住するようになる。<sup>(186)</sup> 特に、永享七年一二月一九日の移徙に際して、『看聞日記』同日条には「当日奉行隆富朝臣（四条隆富）也、伝奏源宰相（庭田重有）也、年預雖未補先其代重賢（庭田重賢）也」と記されている。貞成が近臣庭田重有を「伝奏」として、「奉行」（奉行院司）・年預を定める意識が認められる。貞成とその近臣たちの自覚としては、公式に認められてはいないけれど、既にして院庁を有する太上天皇であった。貞成の洛中移転で廷臣達の伏見官家への出入りが頻繁になり、実態としても崇光流の復辟が進行した。とはいえ、実際に院政をしなくことにこだわるのは得策ではなかった。

義教横死後の『建内記』嘉吉元年十一月八日条によると、時房は内大臣を望んで貞成親王に「内奏」を斡旋してもらいたいと働きかけたという。貞成は「内々可被執申之条、毎事御斟酌、近日一向可（被）任中山（中山定親）奏聞之由、及其沙汰、閑伝奏不可有内奏」として鄭重に断った。貞成が実子である後花園天皇に「内々」口入することは可能ではあるが全て遠慮している。近日、天皇への奏上は伝奏である中山定親に一本化するという決定がなされており、伝奏を介さない貞成からの「内奏」は行いうつ<sup>(187)</sup> もりが無いということである。時房は前日に定親に奏状を託しているの、貞成には口添えを頼んだだけだが、果たせなかった。時房は後光厳流に忠実な廷臣だが、天皇に「内奏」するため父貞成親王に口入を求めた。貞成が「治天の君」の実質を得るチャンスが到来していたのである。しかしながら、貞成は「治天の君」の実質化を求めなかった。その理由は、崇光流に対する廷臣たちの反発を懸念したからであろう。

義教の死により、義教と天皇との結節点であった「公武間申次」伝奏中山定親が貞成と天皇との結節点に変化する可能性もあったと思われる。しかしながら、実際には天皇に専属する親政形態に移行した。後花園の親政を軸として、後光厳流の存続という名目のもとで、崇光流の復辟を穏便に達成するという政治的配慮があったことが窺われよう。

義満の「治天の君」に類する行為は、後光厳流の「治天の君」

後円融上皇の死没を契機として始まった。義満の場合、後小松天皇の祖母崇賢門院との関係は非常に親密である。後小松天皇は義満の出家後も政務の全権を委任しており、敵対的な権限奪取とは言えない。義教の場合には、後光厳流の「治天の君」後小松上皇の死没を契機として「治天の君」に通じる関与が始まった。後花園天皇を擁立したのは義教であったと言っても良く、後花園天皇の実父貞成親王との関係も親密である。敵対的に権限を奪取したとは言えない。いずれの場合にも、「治天の君」の欠如に対応する代行という側面をみて良い。

義教は義満とは違って「みずからを上皇に擬す」挙動が顕著だとは思われない。義満が上皇のように振る舞ったことの背景には、崇光上皇の院政を阻止して長講堂領の帰属問題を解決する強権行使の必要があったとみられる。義教の場合には、貞成が院政をしいたとしても義教は困らなかったのである。しかしながら、廷臣たちがこれを許さなかった。共通する条件は、崇光流をして「治天の君」たらしめえないという朝廷政治の対立様相であった。後小松院政期の伝奏支配は幕府首班と後光厳流の「治天の君」後小松上皇との協調によってなされた。これらすべての背景に、後光厳流と崇光流との対立があったと言える。

嘉吉の乱の直後から、後花園天皇は南都伝奏を復置するなど積極的な施策を講じる。義教の横死によって自由になったという側面はあるけれど、逆に義教という庇護者を欠くこととなったため、

朝廷側が幕府に対して積極的に要求を突きつけてゆかねばならなくなつたという側面もある。朝廷の欲求に基づく伝奏の武家への働きかけ、「武家へ働きかける伝奏」としての「武家伝奏」という実態が顕在化してゆくと考えられる。

#### 【「武家伝奏」への展開】

足利義教がまだ健在である永享一二年三月一日、万里小路時房のもとへ「賀茂祭伝奏事、可存知之由 勅定」という頭弁中御門明豊からの連絡が来た。<sup>(189)</sup>時房は「公武間申次」伝奏中山定親に「如去年已〈室町殿様〉被申談候哉、無心元存候」という書状を出した。これとは別に勾当内侍を通じて天皇に、「昨日雖被仰下、未被申談 室町殿歟、如去年以中山、先被申此趣之条、可然哉」と申し入れた。『建内記』の前年の記事に該当することは見えないが、永享一一年春頃、後花園天皇の発令により時房に賀茂祭伝奏を命じることがあったらしい。その時の経験から、時房は、この発令が義教の事前承認なしに行われうるものと承知しており、幕府に対して惣用下行を交渉する必要があることに鑑みて、予め時房が賀茂祭伝奏を勤めることについて義教の承認を得ておかないと反発を買う恐れがあると考えたらしい。定親や天皇に義教の承認を得るよう求めたのである。

後小松上皇の没後、伝奏の任免権は後花園天皇に移行していたようだ。賀茂祭伝奏万里小路時房の指揮する上卿・奉行は天皇の



指揮下にあったと言える。造内裏伝奏坊城俊任を北山殿に呼んで奉行の人選をした義満と比べると、義教の関与は間接的であった。

さて、中山定親は時房が賀茂祭伝奏を勤仕することを義教に報告して承認を受け、幕府側の下行担当者を指名してもらい、一四日に時房に報じた。<sup>190</sup>行事伝奏と武家との接触の間に、「公武間申次」伝奏が介在する関係にあることが知られ、伝奏制度全体のかなで「公武間申次」伝奏の占める位置が特殊で重要なものになっていることがわかる。

三月一六日、賀茂祭に参向する女官の人選を求めた時房の申し入れに対して、大納言典侍広橋綱子（兼宣女）から回答があった。<sup>191</sup>女使は日野資親の姉にあたる権大納言典侍になさるから資親に知らせるように、坂上明世が検非違使を望んでいることと併せて、「いづれも、てんそうにおほせたんせられて、申御さた候へく候よし申とて候」と記されていた。時房は綱子が時房に対して「伝奏と相談せよ」と記したのが気に入らなかつた。「伝奏とは当時中山宰相中将公武申次、雑事大略一身如奔波、仍如独称也、此祭事、予可為伝奏之由被仰下之、已奏聞之上者、此称、臨其事可被用歟、女中未練之間、如此被書者歟」という感想を記している。「賀茂祭伝奏」である時房に対して「伝奏」中山定親と相談せよというのは、自分の「賀茂祭伝奏」職を蔑ろにしている。綱子が「伝奏」称号を中山定親の「如独称」く用いているのは「未練」の故だと言っている。「如独称」く用いる理由を「当時中山宰相中将公武申

次、雑事大略一身如奔波」しと指摘している。

義教時代の末期には「公武間申次」伝奏の任免が繰り返されて、ただ一人（兼郷ついで定親）に万事が集中するようになっていた。痾癩もちの義教が思いのままにした結果、業務の集中する兼郷や定親の権威が増幅・強化されてしまったのである。「伝奏」といえば、本稿に云う「公武間申次」伝奏と同義であるという実態になっていた。「公武間申次」伝奏への業務集中で、伝奏制度全体が影響を受けるようになっていったのである。

「公武間申次」という点から「武家伝奏」・「公武伝奏」と呼ぶ慣行、「雑事大略一身如奔波」という点から「惣伝奏」と呼ぶ慣行が成立してゆくと見通される。次に掲げる史料は、瀬戸薫氏が「武家伝奏」呼称の初見史料として提示されたものである。<sup>192</sup>

史料①『康富記』宝徳元（一四四九）年閏一〇月二五日条

此次自伝奏（朔旦冬至旬儀伝奏日野町資広）言付被申子細有之、今度総用以下事、町殿（行事伝奏日野町資広）被問答処、武家伝奏中山中納言殿（親広）相副可被出切符之由、自公方被仰出、此条為難儀之由、被申遣之、備州（伊勢備中守貞親）返答云、此事自中山殿（中山親広）被仰之間、可為其分之由申入了、兎も角も其方にて可有御定由也、又此分令申伝奏町殿（日野町資広）了

朔旦冬至旬儀の出仕者に対して幕府から費用を給付してもらうための証書（切符）の発行形態が話題になっている。行事伝奏に定められた日野町資広が単独で「切符」を出していたが、「武家伝奏中山中納言殿」親広から横やりが入った。親広は、資広・親広連署で発行するよう武家に申し入れ、幕府政所伊勢貞親が足利義政に上申し、裁可を得たという。この処置に怒った資広が中原康富を通じて抗議したところ、伊勢貞親は朝廷側（武家伝奏中山と行事伝奏日野町と）で調整すべき問題だとして突っぱねたとある。

朝廷行事を当該行事限りで担当する行事伝奏は、費用を負担する幕府側と折衝するため、「公武間申次」伝奏と協議しなければならなかった。史料<sup>①9</sup>で「武家伝奏」と呼ばれている中山親広は、賀茂祭伝奏万里小路時房が義教への取り次ぎを依頼した「公武間申次」伝奏中山定親の子息である。文安五（一四四八）年三月末に父定親の病氣により「相代、可為伝奏之由被仰出」た。<sup>①9</sup>親広の「武家伝奏」は、父定親の「公武間申次」伝奏を継承したものであったのである。「公武間申次」伝奏・「武家伝奏」は常置の職らしい。寺社伝奏の場合にも似たような事情が生じていた。

万里小路時房は足利義教横死後の嘉吉元年一〇月に興福寺・春日社の訴訟を扱う南都伝奏に補任された。既に指摘したように、時房は正長二年二月二五日に「南都伝奏」となり、永享五年一〇月に「奈良伝奏（南都伝奏）」を改易されて、兼郷が代わった。永享八年に兼郷が失脚してから南都伝奏は欠員状態になっていたよ

うである。『建内記』嘉吉元（一四四二）年一〇月一九日条によれば、「近日不被置伝 奏之間、社家訴訟等相積」という理由から、関白二条持基と後花園天皇が協議して南都伝奏を再設置したという。いったん中山定親に命じる案が検討されたが、定親は「旁繁務之間難叶」と訴えて固辞した。天皇も「依繁務、可遅引者、又無其詮歟」と配慮して前任者である時房を補任した。寺社の要望を汲んで武家に働きかける必要性が認識され、公家主導で再設置されたのである。

ところが、幕府側では時房の南都伝奏職を重視せず、「公武間申次」伝奏中山との折衝で処理しようという姿勢が目立つたらしい。時房は幕府側の態度に憤慨して、『建内記』文安四（一四四七）年九月七日程に「凡伝 奏者、人数有濟々事也、其内其社・其寺等伝 奏在之、近日伝 奏少人数、普広院殿（足利義教）御末比、中山（彈正尹）（中山定親）一身申次之間、人々以中山喚伝 奏、不可説之事也」と記している。時房は南都伝奏に任じられたが、武家側が自分を尊重しないので怒っている。その原因として、義教時代から寺社ごとに設置される伝奏が欠員となり、一般的に「伝奏」といえば「公武間申次」伝奏を単独で務めている中山定親のことと考えるようになってしまったからだ、と述べている。

行事伝奏も寺社伝奏も武家と接触する必要があったのだが、「公武間申次」伝奏の介在を必要とする側面があった。いっぽう、武家側では交渉相手の一本化を求める都合があつて、これも交渉が

「公武間申次」伝奏に集中する契機になったと思われる。

二木謙一氏は、永正年間以降、伝奏の管掌が朝幕交渉に限定されて「武家伝奏」と呼ばれるようになる<sup>194</sup>とされ、富田正弘氏は、室町期、特定の寺社に対応する寺社伝奏に対し、政務全般を扱う「惣伝奏」があり、戦国期に入って「惣伝奏」が「武家伝奏」と呼ばれるようになったとされる<sup>195</sup>。両氏は、論理は異なるものの複數存在した伝奏職のなかから「武家伝奏」・「惣伝奏」が析出すると把握されており、如上の観察結果と符合する。「惣伝奏」の呼称は、他の伝奏に対して優越するという実情と関連し、「武家伝奏」の呼称は朝廷側を代表して幕府と折衝することと関連する。行事費用を幕府に依存し、訴訟の処理を幕府に依存する関係から、行事伝奏・寺社伝奏が幕府との交渉を担う「公武間申次」伝奏に従属するようになったと考えられる。史料<sup>196</sup>で伊勢貞親が「兎も角も其方にて可有御定」しと述べているように、このような伝奏の相互関係に対して幕府は無関心であった。

二木・富田両氏は「武家伝奏」の制度化を一六世紀と考えておられ、成熟・安定という点を考えれば領けないものでもないが、原型は義教時代に遡ると考えられる。

森茂曉氏は「武家執奏」の廃絶を契機として、永徳年間に「伝奏」の機能が転換して義教期の「公武間申次」に近いものになったと想定された<sup>196</sup>。本稿では、自身が「治天の君」として振る舞った義満については朝幕交渉の仲介者の存立余地を認めず、義持時

代に特定の伝奏が朝幕交渉の担当としてあらわれ、義教時代の「公武間申次」伝奏の原型になったとした。「公武間申次」伝奏は、行事伝奏・寺社伝奏と武家との接点に介在しており、義教時代の末期において既に行事伝奏・寺社伝奏と区別される特殊性を獲得していた。「伝奏」と言えば「公武間申次」伝奏を指す、という状態になっていたのである。

義教嗣立直後に幕府側の提案で設置されたことからみて、「公武間申次」業務そのものは朝廷側からも武家側からも必要な業務として認められていたと言える。しかしながら、義持期の伝奏のうち「公武間申次」の実態を示した者は、全ての伝奏ではなく、武家首班に対して私的・主従制的な奉仕を行っていた者である。伝奏は朝廷の公職だが、「公武間申次」を務める者は武家の家産官僚として強固な地位を占めていなければならなかった。伝奏と足利家の政所別当（恐らく年預別当）とを兼帯していた日野重光ついで広橋兼宣の時代に明瞭である。近世においてなぞらえれば、高家の公家衆から武家伝奏を選任する、あるいは、幕府老中に任じられた公家衆を武家伝奏に定めるという比喩になる。

日野重光は公卿でありながら政所別当を兼ねる異様な挙動をとった。応永二〇年代の広橋兼宣の場合にも、家政機関の長と思しい様相がある。しかしながら、義教時代の「公武間申次」伝奏には、『師郷記』永享四年四月廿七日条にみえる「室町殿家司」に名を連ねる者はいない。「公武間申次」伝奏と公家衆の務める足利家政

所との連関は薄れるようだ。がんらい、公家衆の武家に対する私的な主従関係は、崇光流に従属する廷臣を制圧するための「足利義満の公家化」によって造成された。後光厳流が断絶して皇統間対立が解消したあと、政治的な必要性を低下させるのであろう。伝奏のあり方は、「公武間申次」という業務のあり方に牽引されて変化してゆくと見通される。

### 【おわりに】

嘉吉の乱後の朝幕関係については、伊藤喜良氏と富田正弘氏との間に論争がある。両氏は、幕府側が治罰の院宣・綸旨の発給を要請し朝廷がこれに応える連繫に特徴を認められた。伊藤氏は武家の政治的権威の脆弱性と朝廷に対する権威面での依存性を見いだされ、富田氏は朝廷が武家の要求を容れる点から武家権力の優越性を見いだされた。朝幕は相互依存関係にあるので、権威・権力は相補的な関係で捉えるべきかと思われる。

寿永二（一一八三）年八月六日、九条兼実は後白河上皇から、後鳥羽天皇の踐祚を直ちに行うべきか神器の還京を待つべきかを問われた。<sup>(99)</sup> 兼実は安徳天皇と神器を平家が保持している状況であるから、「不立主、有征伐、於議有妨」り、つまり新主なしには「征伐」の義理が立たないとした。兼実は継体天皇の故事を引き合いに出して剣・璽渡御を必要条件ではないとし、「群臣義立」の形で直ちに新主を立てるべきだと答申し、実施された。光厳・光明両

天皇の踐祚に用いられ、後光厳の踐祚でも参照された先例である。中世を通じて、天皇は戦争を正統化するための鍵であり続けたのではあるまいか。

後光厳天皇の踐祚は幕府が南朝と戦うために不可欠と考えた条件である。義満・義持の朝廷対策を後光厳流を正統化するものと評価すれば、それは戦争を正統化するための鍵としての天皇を維持するものだったと考えるであろう。足利義教は嗣立直後から、後南朝および鎌倉公方足利持氏との対立という危機に直面していた。<sup>(200)</sup> 義教は治罰綸旨を求めることに必ずしも積極的ではないが、発給させること自体は極めて容易い状態になっていた。「公武間申次」伝奏を介する朝幕の連繫が確立していたからである。

後光厳天皇の踐祚当時の朝廷は、大覚寺統・持明院統の皇位継承争いの結果として、両統ともに正統な皇位継承が不可能という政治的破産状態に陥っていた。義満以降の幕府首班の政策は、後光厳流の継続を軸として破産状態を解消する再構築の施策と評価できる。後光厳流の断絶を承けて復辟した崇光流は、再構築の成果を壊さないように、あえて復辟を標榜することを避けてこの秩序を継承した。この間に起きた変化を比較してみると、皇位継承争いのために朝廷が主導して戦争を起こす状態から、朝廷はあくまでも幕府の要求に応じて戦争に正当性を与える存在に転換した、と言える。武家の介在で朝廷が再構築されたという側面から、朝幕の連繫の変化を捉えるのが良いのではないかと考えられる。

足利義満の創設した「内裏小番」は、朝幕の対立や権限争奪という問題構成では位置づけがたい。小番衆に対する指揮を伝奏が担う現象は義満の晩年から認められ、義持以降にも踏襲される。しかしながら、小番衆は幕府の力が衰え將軍の在京が不安定になった戦国期にも天皇を直接支える人間集団として存続した。公事に参加する上卿以下の人員も全て小番衆を務める公家達によってまかなわれたという。<sup>(201)</sup> この意味で、幕府の介在は本質的ではない。公家の政治制度として理解するのが適切であろう。

最初に言及した田中暁龍氏の業績を再び参照すると、霊元天皇期には小番衆の階梯を駆け上って昇進する近臣の「超越」が、功と先途によって構成される官位制的な秩序との間に矛盾を引き起こした。天皇と廷臣との距離が、二つの異なる原理によって攪乱されている現象だといえる。本質的に異なる原理が共存するようになった端緒は、足利義満の「内裏小番」の設定に求められる。足利義満の「内裏小番」は脆弱な正統性しか有していない後小松天皇を公家社会の内部に定位させる権力的な仕組みとして設定された。天皇制の再構築という文脈に位置づけるのが妥当ではないかと考えられる所以である。

義教期よりのち、戦国期にかけての様相は筆者の能力を超える問題であり、論じることができなかった。読者諸賢の御海容を乞う次第である。

(1) 同氏『近世前期朝幕関係の研究』二〇二一年吉川弘文館、特に第一章「寛文三年近習公家衆の成立と展開」(初出一九〇年)に示された、内々衆↓近習衆↓御側衆という小番衆の内部階層を階梯とする近臣の昇進が、官位制的な昇進慣行を破る「超越」となって紛議をきたし、統制システムの整備に至る点が興味深い。

(2) 「熊谷直之氏所蔵文書」『宸翰英華 別篇 北朝 図版篇』一九九二宸翰英華別篇編集会一九・二四・五頁。本史料については赤松俊秀氏『光厳天皇遺芳』一九六四年常照皇寺、村田正志氏「解説」『宸翰英華別篇北朝図版篇』一九九二年宸翰英華別篇編集会、岩佐美代子氏『光厳院御集全釈』二〇〇〇年風間書房、飯倉晴武氏『地獄を二度も見た天皇光厳院』二〇〇二年吉川弘文館を参照。

(3) 『建武二年六月記』六月一九・二二日条『大日本史料』(以下「史料」と略す)第六編之二、四三六〜四三七頁・四三九〜四四〇頁)によれば、六月中旬に策動が発覚し、光厳上皇も建武政権の監視下に置かれた。

(4) 『園太暦』観応三年八月一七日条。

(5) 『園太暦』観応二年十一月一七日条より、正平一統後も実夏は直仁の東宮大夫にとどまったとわかる。『公卿補任』より東宮大夫解官は正平七年閏二月二〇日。

(6) 『園太暦』観応元年三月八日条に、石山寺に参詣して「更

非私門事」る祈願を行った旨の記事があり、正平六(観応二)年一二月一五日条に収める直仁の登極を誓願する願文の「去春(去年春力)参詣之次、発露祈願」したという部分と合致する。

(7) 『看聞日記』応永二三年一月二三日条の死亡記事にみえる享年より逆算。

(8) 前注(4)。

(9) 『玉英記抄』〈官位〉観応三年五月二七日条・前注(4)。

(10) 『京都御所東山御文庫記録』『史料』第六編之二十、四四三〜四四七頁。

(11) 『園太暦』同年二月一九日・五月一五・一六日条。

(12) 同右同年七月二〇日条。

(13) 同右同年閏七月二三日条。

(14) 『賢俊僧正日記』同年七月二二日条『史料』第六編之十九、八五七〜八六〇頁。

(15) 『園太暦』同年五月七日条。

(16) 『愚管記』延文三年八月二三日条。

(17) 『師守記』貞治三年五月二九日条・『薩戒記』応永二五年五月一四日条。

(18) 渡邊世祐「足利義満皇胤説」一九二六年『史学雑誌』三七編一〇号。後述するとおり、崇賢門院仲子の義弟広橋仲光は義満の傍系尊属とみられ、仲子は義満生母紀良子の姉妹であ

る。仲子の父も良子と同じ善法寺通清(『師守記』貞治三年五月二九日条)とみて良い。良子の生年は「勝定院殿集纂諸仏事」所収法語『史料』第七編之十八、二五九〜二六〇頁に記す享年「七十有八年」より建武三(一三三六)年、仲子の生年は『満濟准后日記』応永三四(一四二七)年五月二〇日条死没記事に「御年九十四」とあり建武元(一三三四)年となる。仲子が姉、良子が妹である。

(19) 『本朝皇胤紹運録』後円融院(『群書類従』第五輯、九三頁)。

『統史愚抄』延文三年一二月一二日条。

(20) 前注(4)・『尊卑分脉』。

(21) 『三条公豊公記』(東京大学史料編纂所写真帳六一七三〜一八五)康暦二年六月七日条に日野時光「嫡女」で後光厳の「典侍」となり皇女「一両」を産んだ女子某がみえる。後光厳の典侍には、広橋仲子(中納言典侍)、五条長冬(長能)女為子(宰相典侍)の他に、『師守記』応安七年二月二四日条・『愚管記』同年三月六日条の後光厳追善仏事に「典侍時子」がみえる。「時子」名は時光嫡女にふさわしい。

(22) 拙稿「足利義満・義持と崇賢門院」二〇〇九年、『歴史学研究』八五二号。

(23) 『公卿補任』。

(24) 『村田正志著作集第四卷證註椿葉記』一九八四年思文閣出版、一四四〜一四八頁。後掲史料⑫参照。「置文(讓状)」の年紀

は『伏見宮御記録』貞治二年四月八日勸修寺経頭宛光嚴上皇院宣(『史料』第六編之二十五、四九頁)により推定。

- (25) 同記応安元年一〇月一日条(『史料』第六編之三十二、二二九頁)。

- (26) 同記同年九月二・一八・二二日条(『史料』第六編之三十二、二三五・二三六頁)。

- (27) 史料①(前注(2))省略部分に「先年以興仁親王欲備太子之位之時、朕更有所思惟、而依藤原大納言之言、遂成其事、是豈非親王之功臣乎」とある。

- (28) 前注(24)書、二七七頁。

- (29) 同記同年九月二四日条(『史料』第六編之三十二、二三六頁)。

- (30) 同記同年一月三日条(『史料』第六編之三十二、二四〇・二四二頁)。

- (31) 『史料』第六編之三十二、二四二頁。

- (32) 同記同年一月三日条(『史料』第六編之三十二、二四〇頁)。

- (33) 『史料』第六編之三十二、二三九・二四〇頁。

- (34) 桃崎有一郎氏『後円融院宸記』永徳元年・二年・四年記  
二〇〇九年『禁裏・公家文庫研究』第三集、七八頁。

- (35) 『兼治宿禰記』永徳二年四月九日条(『歴代殘闕日記』第一五卷、三三二頁)。

- (36) 『実時公記』永徳二年二月二八日条(『歴代殘闕日記』第一五卷、三七〇頁)。

- (37) 『後愚昧記』永徳三年二月一・二・五・一五・一六・一八日・三月一・三日条。

- (38) 『後愚昧記』同日条。

- (39) 同右。

- (40) 『統史愚抄』同日条。

- (41) 同右。

- (42) 『薩戒記』同日条。

- (43) 『吉田家日次記』は東京大学史料編纂所架蔵謄写本二〇七三一・二〇五一・一一による。

- (44) 同氏『足利義満・公武に君臨した室町將軍』中公新書二〇一二年、九三頁。

- (45) 『史料』第六編之三十二、二三六頁。

- (46) 同氏『室町期禁裏小番―内々小番の成立に關して―』一九九〇年、東北史学会『歴史』七六輯。

- (47) 正月一三日・一三日・三月三日・一三日・四月三日条など年間を通じて記事がある。

- (48) 『歴代殘闕日記』第一五卷、四七三頁。

- (49) 前注(24)書、一三〇頁。

- (50) 『後光嚴天皇日記』応安三年九月四日条『史料』第六編之三十二、二六一頁に知行国三箇国・莊園五箇所を「可渡進御領」

として幕府に要求する旨の記載があるが、全貌は知りたい。  
もとより、長講堂領と比較できる規模ではない。

- (51) 前注(24) 書、二七五頁。『看聞日記』永享三年四月一九日条。

- (52) 『満濟准后日記』正長二年二月廿七日条・『愚管記』永和四年十月四・廿二・廿六日条。

- (53) 『後愚昧記』永和三年八月二十九日条・永徳二年四月七日条、  
『愚管記』康暦元年十一月二八日条。

- (54) 『園太暦』観応三年七月一日条・『弁官補任』。

- (55) 『後光厳天皇日記』応安三年九月二日条(『史料』第六編之三十二、二三五頁)。

- (56) 『公卿補任』、『後愚昧記』応安四年三月一六・二三日条、『愚管記』永和元年二月二日・永徳元年正月二九日条、前注(22) 拙稿。

- (57) 『教言卿記』同日条。

- (58) 『後愚昧記』同日条、『公卿補任』。

- (59) 拙著『東京大学日本史学研究叢書1 室町幕府將軍権力の研究』一九九五年、東京大学大学院人文科学研究所国史学研究室、一二五頁。「足利義満と伝奏との関係の再検討」一九九五年『古文書研究』四一・四二合併号、九七頁。

- (60) 前注(24)『椿葉記』、一三八頁に、後円融が「永徳二年四月御讓位ありしかとも、今度は伏見殿より御微望を出さるる

に及はねは、あらそふ方なく一の御子(後小松院)御位につきぬ」とある。

- (61) 前注(37)。

- (62) 一九九〇年、中公新書。

- (63) 同書三五頁。

- (64) 同書四四頁。

- (65) 同書四〇頁。

- (66) 同氏「二条良基書状」一九八八年、『立正史学』六四号。

- (67) 『洞院公定公記』応安七年四月十日条・『後愚昧記』同年六月三日条。

- (68) 『後愚昧記』康暦元年五月二二日・永徳三年四月一九日条。

- (69) 同氏「応永初期における王朝勢力の動向」一九七三年、『日本歴史』三〇七号(同氏著『日本中世の王権と権威』一九九三年思文閣出版に再録、三〇九頁)。

- (70) 同氏「伝奏の活動と義満政権」(初出一九七九年、同氏『足利一門守護発展史の研究』一九八〇年、吉川弘文館第三編第三章第三節に再録)。

- (71) 同氏『足利義満』一九八〇年、平凡社(一九九四年平凡社ライブラリーとして再刊、一二三頁)。

- (72) 同氏「室町殿と天皇」一九八九年、『日本史研究』三二九号、一八頁。



- (73) 『史料』第七編之一、二四九頁。
- (74) 『史料』第七編之一、二四頁。
- (75) 「妙心寺文書」『史料』第七編之一、一六六～一六七頁。
- (76) 「賀茂社諸国神戸記」『史料』第七編之一、二四九頁。
- (77) 『春日權神主師盛記』至徳二年八月三〇日条『歴代殘闕日記』第十五卷。至徳二年八月三〇日万里小路嗣房奉書。小川信氏前注(70)書、七三四頁注(5)では、伝奏が私的に奉者となったことが指摘されている。
- (78) 『史料』第七編之一、四九二頁。
- (79) 『史料』第六編之三十二、二六一頁。
- (80) 『日吉社室町殿御社参記』応永元年九月一日条『史料』第七編之一、六六三頁。
- (81) 「京都帝国大学所蔵文書」『史料』第七編之一、七一五～七一六頁。
- (82) 『史料』第七編之一、七七四～七七五頁。
- (83) 『尊卑分脉』。
- (84) 『史料』第七編之一、七七五～七七九頁。
- (85) 『公卿補任』。
- (86) 同氏「応永初期における王朝勢力の動向」一九七三年『日本歴史』三〇七号、「伝奏と天皇—嘉吉の乱後における室町幕府と王朝権力について—」一九八〇年『豊田武博士古稀記念日本中世の政治と文化』吉川弘文館(いずれも同氏『日本

- 中世の王権と權威』一九九三年、思文閣出版に再録。
- (87) 同氏「室町時代における祈禱と公武統一政権」一九七八年『中世日本の歴史像』創元社、「中世公家政治文書の再検討③奉書—伝奏奉書—」一九八八年『歴史公論』四卷一二号、「嘉吉の変後以後の院宣・綸旨—公武融合政治下の政務と伝奏—」一九九一年小川信氏編『中世古文書の世界』吉川弘文館、「室町殿と天皇」一九八九年『日本史研究』三一九号。
- (88) 前注(59)拙稿「足利義満と伝奏との関係の再検討」。
- (89) 伊藤氏前注(86)「応永初期における王朝勢力の動向」七五～七六頁、「伝奏と天皇」三五八～三六〇頁、小川氏前注(70)著書七二九～七三一頁、特に富田氏前注(87)「中世公家政治文書の再検討③奉書—伝奏奉書—」一八九～一九〇頁、「室町殿と天皇」一一～一二頁・一八～一九頁。
- (90) 橋本義彦氏「院評定制について」一九七〇年『日本歴史』二六一号(同氏『平安貴族社会の研究』一九七六年、吉川弘文館に再録、六七～六九頁)、伏見宮本「政道条々」『皇室制度史料 太上天皇三』一九七二(二〇〇頁)。
- (91) 前注(24)書、一四四頁。
- (92) 前注(24)書、一四六～一四七頁。
- (93) 「勅修寺文書」『史料』第七編之三、五五七～五五八頁。
- (94) 『荒暦』同日条『史料』第七編之二、三五頁・三六～三七頁。

(95) 『荒暦』応永二年六月二〇日条(『史料』第七編之二、五七、五八頁)。

(96) 『荒暦』応永二年六月二六日条(『史料』第七編之二、六四、六五頁)。

(97) 白井信義氏『足利義満』一九六〇年、吉川弘文館人物叢書一〇二、一〇四頁、『続史愚抄』応永三年九月二一日条(『史料』第七編之二、五四三頁)。

(98) 『迎陽記』同日条(『史料』第七編之四、九一四、九一九頁)。

(99) 『史料』第七編之四、九三七、九三八頁。

(100) 『吉田家日次記』同日条(『史料』第七編之四、九三八頁)。

(101) 白井氏前注(97) 書、一一五、一二三頁、「大乘院日記目錄」(『史料』第七編之二、七七八頁)。

(102) 『後愚昧記』永和三年二月二八日・六月二六日・永徳元年九月二六日・永徳三年二月一六日条。

(103) 「梅町殿」呼称の初見は『後愚昧記』永徳三年二月一六日条。

(104) 『迎陽記』同日条(『史料』第七編之三、五九七頁)。

(105) 『東院毎日雑々記』同日条(『史料』第七編之三、八八六頁)。

(106) 『迎陽記』同日条(『史料』第七編之三、九一一、九一三頁)。

(107) 『兼宣公記』同日条。

(108) 「寶鏡寺文書」(『史料』第七編之四、一二四、一二六頁)。

白井氏前注(97) 書、一五八頁。

(109) 白井氏前注(97) 書、一五八、一六一頁。

(110) 『門葉記』・『兼宣公記』同日条(『史料』第七編之五、一五、四七頁)。

(111) 『史料』第七編之五、三九、四〇頁。

(112) 『尊卑分脉』・『兼宣公記』応永三年十一月一日条。

(113) 『後愚昧記』永徳三年四月二五日条に、崇賢門院「判官代」となった記事があり、『兼宣公記』応永九年正月六日条に兼宣が崇賢門院年給申文を作る記事がある。

(114) 『本朝皇胤紹運録』(『群書類従』第五輯)。

(115) 『園太暦』正平六(観応二)年十一月二四日条に南朝使節中院具忠が後村上天皇の「明春可有出御」きことを述べた記事があり、この際に即位式・大嘗会を同年に行った先例の勘進を命じられたらしい。同年二月五日条に「御即位事」と題して「今度即位大祀、一年中可有沙汰之条勿論」とする南朝への先例勘進を収める。翌正平七年正月二日条には、後村上の「御書」に奉答した、「忽仰吾君登極之聖日、朝廷成歓娛」云々の書き出しをもつ書状を収める。上洛後に即位式、大嘗会を連続して実施する予定だったらしい。

(116) 『園太暦』文和二年六月二六日条に収める南方使節吉田宗房のもたらした文書に「去年偽朝踐祚之時出仕人々」云々とあり、後光厳天皇を「偽朝」と呼んでいる。

(117) 同氏「足利義持と後小松『王家』」二〇〇七年『史学雑誌』第一一六編第六号。

(118) 『常永入道記』 応永一九年九月一四日条・『足利家官位記』  
『史料』第七編之十七、四六頁。

(119) 『教言卿記』 同日条。

(120) 『建内記』 正長二年三月三〇日条・嘉吉元年一〇月一九日条、  
『大乘院寺社雜事記』 文明三年閏八月二二日条・『東院毎日  
雑々記』 『史料』第七編之七、二八九～二九一頁。

(121) 『教言卿記』 同年二月一九日条・『諷誦文故実』 『史料』第  
七編之七、八五四頁・『教言卿記』 応永一五年一〇月八日条・  
『放生会記』 応永一九年八月十五日条 『史料』第七編之十  
五、三五三頁。

(122) 『満濟准后日記』・『教言卿記』 同日条。

(123) 『公卿補任』・『弁官補任』。

(124) 『弁官補任』。

(125) 『兼宣公記』 応永一九年九月二七日・一〇月一四日条、『常  
永入道記』 応永一九年九月二七日・一〇月二二日条 『史料』  
第七編之十七、七三・九八頁。

(126) 『公卿補任』。

(127) 『称光院御即位散狀』 応永二二年二月一九日条 『史料』  
第七編之二十一、一八～二〇頁 など。

(128) 安田歩氏「室町前期の院宣・繪旨」二〇〇二年『古文書研  
究』 五五号、五頁。

(129) 『公卿補任』。

(130) 『公卿補任』、松木宗量は『満濟准后日記』 応永二〇年一二  
月一九日条に「仙洞御使」としてあらわれ、以後も後小松上  
皇御所で申次を務めている側近である。

(131) 同氏前注(128)「室町前期の院宣・繪旨」、五頁。

(132) 『建内記』 応永二六年八月一八日・正長二年三月三〇日・嘉  
吉元年一〇月一九日条、「大乘院文書」 『史料』第七編之十  
八、四〇〇・四〇五～四〇六頁・『嚴乘記』 応永二一年一  
月二八日条 『史料』第七編之十八、四〇二頁・『興福寺三  
綱補任』 『史料』第七編之十八、四〇四～四〇五頁。

(133) 『公卿補任』・前注(128) 安田歩氏「室町前期の院宣・繪旨」、  
五頁。

(134) 『圖書寮叢刊 壬生家文書二』 三三〇号・『史料』第七編之  
二十、四〇二頁。

(135) 同右。

(136) 『看聞日記』 応永二三年二月七日・応永二五年五月一六日・  
七月一四日・一五日・二二日・応永二七年正月一六日・応永  
二八年正月一四日条。

(137) 『兼宣公記』に、応永二二年八月一九日に大嘗会に先立つて  
参仕する上卿以下の官人たちが行った「荒見川祓」の用途に  
関する指揮や決済を記録した史料がある。

(138) 『中世法制資料集第二卷室町幕府法』 一六八～一七七。

(139) 前注(128)「室町前期の院宣・繪旨」 七～八頁。

(140) 『兼宣公記』応永二六年七月五日条には、祈年穀奉幣の実施

につき、義持の指示で兼宣が奉行の分配を調べ、頭弁勧修寺  
経興に奉行を命じる真の発給者を示さない奉書(伝奏奉書)  
を送り、その後、子細を後小松に知らせたと記されている。

(141) 『兼宣公記』応永二二年七月「義持公日吉社参記」には、兼  
宣が下家司中原盛尚・「政所伊勢守」伊勢貞経・幕府奉行人  
飯尾貞之を指揮する記述があり、年預家司とみられる。『建  
内記』応永二六年八月一二日条には義持の石清水放生会上卿  
参向に際して、兼宣が「御出奉行」「家司」である子息宣光  
を指揮して供奉の公家衆を催促し、幕府奉行人を指揮して衛  
府侍・帯刀を指揮したことが記されている。

(142) 義持の家司としての兼宣の活動に生じた中断期は、『満濟  
准后日記』同年八月三日条から、同記応永二九年二月二二日  
条の間とみられる。

(143) 『建内記』同日条。『薩戒記』応永三二年六月二七日条では、  
称光天皇が父後小松上皇に不満を訴える使者を務めるよう時  
房に求めている。信頼していたらしい。

(144) 『建内記』応永三五(正長元)年二月二六日条。

(145) 『建内記』応永三五(正長元)年二月二五日条、『薩戒記』  
応永三三年八月二〇日条。

(146) 『建内記』応永三五(正長元)年三月三日条力。

(147) 『看聞日記』永享三年四月一七日条。

(148) 義教の申次である大館満信宛、後小松上皇の近臣四辻季保  
宛、担当奉行の甘露寺忠長宛の他、参仕すべき公家衆に宛て  
たものが含まれる。

(149) 『公卿補任』に載せる時房の年齢より逆算。

(150) 『満濟准后日記』同日条。

(151) 『満濟准后日記』同日条、『看聞日記』同月一三日条。

(152) 『建内記』永享二二年三月一日・二日・四日・一六日  
条。

(153) 『建内記』嘉吉元年一〇月一九日・二日・二八日。

(154) 『尊卑分脉』、『後愚昧記』永徳三年三月一日条、『兼宣公記』  
嘉慶二年六月五日条。

(155) 『北山殿御申文土代』(『史料』第七編之四、四一〇頁)。

(156) 『教言卿記』応永一四年二月二一日・二四日条。

(157) 『満濟准后日記』同年七月二一日条、『薩戒記』同年七月一  
八日条。

(158) 『満濟准后日記』同日条。

(159) 『看聞日記』永享三年四月七日条。

(160) 『看聞日記』永享三年三月二四日条。

(161) 『看聞日記』同日条。

(162) 『満濟准后日記』同年三月一二日条、『公卿補任』。

(163) 『看聞日記』永享三年五月二四日条、『公卿補任』。

(164) 『満濟准后日記』同日条、『看聞日記』永享四年六月一日・

二日・四日条。

(165) 『看聞日記』同日条。

(166) 『看聞日記』永享五年一〇月一三日条。

(167) 『看聞日記』永享八年一〇月一五日・一七日程。

(168) 『建内記』嘉吉元年一〇月九日程。

(169) 『建内記』嘉吉元年一二月二四日程。

(170) 『看聞日記』永享三年三月二四日程。

(171) 『看聞日記』同日条・同月二九日程。

(172) 『看聞日記』同日条。

(173) 『看聞日記』同日条。

(174) 同氏前注(87)「室町時代における祈祷と公武統一政権」三一六・三二七頁。

(175) 一九七九年、そして、『室町時代の一皇族の生涯―『看聞日記』の世界―』と改題して二〇〇二年講談社学術文庫として再刊。

(176) 『建内記』文安四年三月六日程・『満済准后日記』永享五年一〇月二三日条。

(177) 『満済准后日記』永享五年一〇月二四日程。

(178) 『満済准后日記』永享五年一〇月二三日条。

(179) 『史料』第六編之三十二、二四〇〜二四二頁。

(180) 横井氏前注(172)新書二九〜三〇・三八〜四一・一四四〜一四六頁。

(181) 『看聞日記』同日条、村田氏前注(24)『證註椿葉記』二四六頁。

(182) 『看聞日記』同日条。

(183) 『看聞日記』同日条。

(184) 『看聞日記』同日条。

(185) 村田氏前注(24)『證註椿葉記』七九〜八六頁、横井氏前注(171)新書三三二〜三三五頁。

(186) 『看聞日記』永享七年八月六日・一二月一日・永享八年二月九日程。なお、横井氏前注(171)新書三五〇〜三五四頁参照。

(187) 『建内記』同日条。

(188) 『建内記』嘉吉元年一〇月一九日程など。

(189) 『建内記』同日条。

(190) 『建内記』同日条。

(191) 『建内記』同日条。

(192) 同氏「室町期武家伝奏の補任について」一九九三年『日本歴史』五四三号。

(193) 『康富記』文安五年三月七日程に「嚴父霜台尹(中山定親)多年伝奏也、正月十日中風以後未無出仕之間、伝奏事被辞申之処、父卿出仕之間、相代可為伝奏之由、被仰出云々」とあり、父定親の「公武間申次」伝奏を代行する形で任についた。

(194) 同氏執筆「武家伝奏」項、一九九一年『国史大事典12』吉川弘文館。

(195) 同氏執筆「寺社伝奏」項、一九九三年『日本史大事典3』平凡社。

(196) 同氏『南北朝期公武関係史の研究』一九八四年文献出版、五〇三～五〇四頁。『増補改訂南北朝期公武関係史の研究』二〇〇八年、思文閣出版五〇三頁。

(197) 同氏前注(86)「伝奏と天皇」。

(198) 同氏前注(87)「嘉吉の変後以後の院宣・綸旨」。

(199) 『玉葉』同日条。

(200) 佐藤進一氏「足利義教嗣立期の幕府政治」一九六八年『法政史学』二〇号。

(201) 池亨氏「織豊政権と天皇」一九九三年『講座前近代の天皇第2巻』青木書店九四頁以下。

(202) 同氏前注(1) 著書二二～二三頁、靈元の個人的な信任に基づいて小番衆の階梯を駆け上った甘露寺方長は、「諸人」から「佞臣」と指弾され、幕府制法に背馳する登用とも批判された。昇進の急速さと伝統的官位制的秩序との矛盾をみてとれる。本稿では、この観点に基づいて義満の制定した「内裏小番」の位置づけを試みた。

(学習院大学教授)